

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1996年度 年 報



栗東町教育委員会
（財）栗東町文化体育振興事業団

表紙の写真

下戸山古墳
下鉤東遺跡

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1996年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が主体となり財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助調査および町事業調査は栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

栗 東 町 教 育 委 員 会 社会教育課
文化財保護係

課 長 乾 澤 亮
係 長 奥 村 泰 祥
主 査 清 水 好 洋
主 事 松 本 正 人
課 長 堀 江 龍 海
係 長 大 崎 隆 志
主任技師 近 藤 広
技 師 雨 森 智 美
技 師 佐 伯 英 樹
技 師 猿 向 敏 一
技 師 藤 岡 英 礼

財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財調査課
調 査 係

4. 本書の執筆は各調査担当者及び管理係主事補宮川圭二が行い、編集は執筆者の意向のもと佐伯が行った。
5. 調査内容中の調査地位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて5千分の1である。
6. 調査参加者

現地調査作業	青 木 タキ子	石 原 恵 子	井 上 恵 子	井 上 妙 子
	井 上 良 子	上 田 和 江	大 岡 道 代	太 田 好 枝
	大 島 洋 己	鹿子島 美津子	川 崎 う た	川 辺 実樹子
	木 下 政 子	久 徳 良 子	教 野 妙 子	北 野 ふみえ
	国 松 好 子	駒 井 正 史	清 水 宏 行	波 江 享 一
	園 田 菊 江	竹 村 ヒロ子	千 代 清 美	塚 本 紀代美
	辻 井 一二美	徳 地 久 弥	富 田 由美子	中 川 義 信
	中 野 久 子	西 岡 たよ子	西 田 百合子	牧 野 富 子
	平 松 しず子	堀 部 アキ子	森 野 靖 子	横 山 こ と
	渡 辺 薫			
整理作業	岩 根 隆 子	内 田 麻 衣	奥 村 美枝子	木 村 三津子
	穴 戸 貴 子	宮 嶋 八重美	森 智 美	

目 次

例 言

目 次	2
事業報告	3
栗東町出土文化財センター・和田古墳公園オープン!!	5
遺跡位置図	7
受託事業一覧表	10
①霊仙寺遺跡	11
②縄遺跡	12
③野尻遺跡	13
④⑤野尻遺跡	17
⑥下鉤遺跡	18
⑦下鉤遺跡	19
⑧蓮台寺遺跡	20
⑨手原遺跡	23
⑩手原遺跡	29
⑪下鉤東遺跡	30
⑫辻遺跡	33
⑬辻遺跡	39
⑭辻遺跡	41
⑮辻遺跡	43
⑯坊袋遺跡	46
⑰高野遺跡	47
⑱高野遺跡	48
⑲高野遺跡	49
⑳高野遺跡	53
㉑㉒岩畑遺跡	55
㉓岩畑遺跡	59
国庫補助事業・町事業一覧表	61
㉔霊仙寺遺跡	62
㉕狐塚遺跡	62
㉖辻遺跡	63
㉗下戸山古墳	65
職員の活動記録	69

事業報告

1. 発掘調査事業

今年度受託件数……………23件

国庫補助・町事業調査件数……………4件

2. 普及・啓発事業

現地説明会

・辻遺跡

期日 12月14日(土)AM11:00～12:00 参加者 32名

内容 平安時代の小型銅製如来立像がピットより出土。

・辻遺跡

期日 3月22日(土)PM2:00～4:00 参加者 40名

内容 古墳時代前期の竪穴住居で鉄鎌を使用した祭祀跡を確認。

・下戸山古墳(地元説明会・町事業協力)

期日 3月30日(土)PM2:00～4:00 参加者 40名

内容 範囲確認調査で葺石・周溝が出土。後円部が直径約50mと判明。



辻遺跡現地説明会

出土文化財センターオープン記念ウォーク

期日 5月25日(土)PM9:00～1:00 参加者 38名

内容 下戸山周辺の古墳・遺跡めぐり

夏休み子供考古学自由研究クラブ

期日 7月27日(土)・8月2日(日) 参加者 16名

場所 出土文化財センター 文化財学習室

内容 考古学の話、遺跡のスライド説明、自由研究

出土文化財センター講座

期日 10月12日(土)PM2:00～3:30 参加者 30名

場所 出土文化財センター 文化財学習室

内容 縄文人の食生活―粟津貝塚の調査から―

講師 伊庭 功氏 (勸学館文化財保護協会)

出土文化財センター調査研究報告会

期日 2月8日(土)PM1:30～5:00 参加者 32名

場所 出土文化財センター 文化財学習室

内容 古墳時代の石製品製作について

講師 丸山 竜平氏 (名古屋女子大学教授)

前田 清彦氏 (石川県松任市教育委員会)

近藤 広氏 (当事業団)

安養寺山歴史ウォーク

期日 3月23日(土)PM9:00～16:00 参加者 13名

場所 安養寺周辺の古墳群

講師 兼康 保明氏 (兵庫県埋蔵文化財調査事務所)



安養寺歴史ウォーク

発掘調査成果展 (栗東歴史民俗博物館との共催)

期日 1月5日～2月2日 参加者 1,143名

場所 栗東歴史民俗博物館

内容 1995年度の主要な調査成果の展示

冊子等の発行

栗東町埋蔵文化財調査 1995年度 年報

栗東町埋蔵文化財調査 1993・1994年度 年報Ⅱ

はっくつ95 (パンフレット)

部内研修

期日 11月15日(金) 参加者 町内埋蔵文化財関係職員

場所 三重県阿山郡阿山町、伊賀上野市 方面

伊賀焼伝統産業会館、阿山町ふるさと資料館、御旅所古墳

陽夫多神社、伊賀国分寺



栗東町出土文化財センター・和田古墳公園オープン!!

所在地 滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地

敷地面積 5,908.29㎡

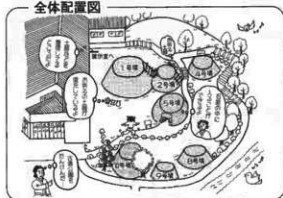
建物面積 1階 891.99㎡

2階 631.22㎡

栗東町には安養寺古墳群を始め多くの遺跡（埋蔵文化財）が所在し、これまでに実施された発掘調査において、縄文時代から近世にいたる様々な時代の貴重な出土資料が発見されています。



全体配置図



栗東町出土文化財センターでは、これらの資料を大切に保存・收藏しながら、最新の調査情報を文化財学習室や展示コーナーで提供し、また敷地内に存する町指定史跡和田古墳群（和田古墳公園）に関しては出土資料等を展示開設することで、みなさまに埋蔵文化財に一層のご理解をいただくことを目的に平成8年度（1996年4月）開設いたしました。

建物平面図



栗東町出土文化財センター

展示室

センターの展示室は「和田古墳群」をテーマとし、和田古墳群の概要や調査状況を解説シートや模型・グラフィックパネルでわかりやすく示すとともに、出土した遺物を「装身具」「武器」「馬具」「土器」の小テーマに分けて展示しています。

このほか展示室には、出土遺物をモデルにした土器ジグソーパズルや古墳の築造景観(推定)等を描いた立体ジグソーパズルを配した「触って学習できる」コーナーを設けていて、パソコンを使ってクイズをしながら、町内の埋蔵文化財についての理解を深めていただくように工夫しております。

収蔵展示コーナー

収蔵庫壁面をガラス張りにし、収蔵庫の中の様子を見ていただくと同時に、町内の主な遺跡から出土した遺物を展示しております。また、出土した土器を時代別に分け実際に触れていただくことの出来るコーナーも設けております。



展示コーナー・文化財学習室

展示コーナーでは調査中の町内遺跡から出土した資料をリアルタイムで展示し、文化財

学習室では、子どもから大人まで親しみやすい歴史マンガ等の図書で自由に歴史の学習をしていただけるコーナーや、パソコンを使ってクイズや、パズルをしながら町内の埋蔵文化財についての理解を深めていただけるように工夫しております。また、町内の遺跡等の調査状況等を納めたスライド上映や、歴史に関する学習会等にも対応しております。



和田古墳公園

平成9年度から5年度にかけて発掘調査された町指定史跡和田古墳群(9基の古墳)のうち7基の古墳を復元し、散策道をめぐらせて気軽に親しめる古墳公園として整備されました。散策道中にある1号・2号墳の頂上からは草津市から大津市域を広く見渡すことができ、奈良時代の地方の中心地であった栗太郡衙(岡遺跡)等を間近に見おろすことができます。また、5号墳については、当時の石室内部まで復元し古墳内部の様子まで見学できるようになっています。

(宮川)





遺跡位置図①



財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財発掘調査

96年度受託事業調査一覧表

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
1 雲仙寺	雲仙寺字南松馬鹿353-3・6	事業所建設	土坑(縄)、旧河道(奈~平)	石鏃、須恵器	11	大崎
2 糺	北中小路2-6	診療所建設	掘立柱建物・井戸・溝(室)	黒色土器・土師器・銅銭	12	大崎
3 野尻	糺961番地	店舗建設	掘立柱建物・区画溝・土坑・柱穴(鎌)	須恵器・土師器・円面硯・緑釉陶器 瓦器、黒色土器	13	猿向
4 野尻	糺字天堂52-2、字海道田440	造成工事	溝(中)	土師器	17	大崎
5 野尻	糺字天堂52-2、字海道田440	造成工事	溝(中)	土師器	17	大崎
6 下鉤	下鉤字高田722-1、726-1	造成工事	旧河道(奈)、整地層(中)	須恵器・土師器・白磁	18	大崎
7 下鉤	下鉤字舟場1746	造成工事	旧河道(弥)、掘立柱建物・溝(平)	須恵器・土師器・黒色土器・羽釜	19	藤岡
8 蓮台寺	下鉤782他	福祉施設建設	基壇・掘立柱建物(奈)	須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦 墓石	20	藤岡
9 手原	手原7丁目828	造成工事	掘立柱建物・土坑・溝・井戸(奈~鎌)	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器 輸入陶器・黒色土器	23	猿向
10 手原	手原3丁目931-1	事務所建設	溝・小穴	須恵器・土師器・銅銭	29	藤岡
11 下鉤東	上鉤字上教田172-1、178	事務所建設	道路状遺構・柱穴・旧河道(奈~平)	須恵器・土師器・緑釉陶器・銅銭	30	藤岡
12 辻	辻字西八王寺、東八王子	区画整理事業	竪穴住居(縄~白)、掘立柱建物(古~平) 旧河道(古~江)	縄文土器・土師器・須恵器 仏像・銅銭(平)	33	近藤
13 辻	辻字南ボケ塚上529-1	地下タンク埋設	竪穴住居・土坑・溝(古)	石鏃、土師器・須恵器・	39	佐伯
14 辻	出庭字かしあげ471-1他	造成工事	掘立柱建物・竪穴住居・土坑(古) 溝・柱穴・土坑(古~近世)	須恵器・土師器・黒色土器	41	佐伯
15 辻	辻字小坂西411-1、412-4	共同住宅建設	竪穴住居・掘立柱建物(古~奈)	須恵器・土師器(奈~平)	43	藤岡
16 坊袋	目川868-1他	児童館建設	土坑(弥)、旧河道・小溝群(中)	弥生土器、土師器・須恵器	46	大崎
17 高野	高野字下戸別当577-1	浄化槽設置	溝・柱穴(古)	古式土師器	47	大崎
18 高野	大橋7丁目388-1他	店舗建設工事	掘立柱建物・雨落ち溝・土坑(平)	土師器・黒色土器(中)、スラグ	48	大崎
19 高野	高野字屋どや520-2	宅地造成工事	土坑・柱穴・耕作痕(鎌)	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器	49	猿向
20 高野	高野字北さるかう 599・604	共同住宅建設	旧河道・柱穴・溝	古式土師器・須恵器・土師器・灰釉陶器 石器・瓦	53	佐伯
21 岩畑	高野467-2	道路改良工事	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝(古~近)	須恵器・土師器・鉄滓(古)	55	佐伯
22 岩畑	高野467-2他	道路改良工事	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑(古~中)	須恵器・土師器(古) 黒色土器・陶器・土師器・瓦(鎌)	55	佐伯
23 岩畑	高野字一橋494	宅地造成工事	竪穴住居・柱穴・旧河道	須恵器・土師器	59	藤岡

遺構等は、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

① 靈仙寺遺跡

調査地点 靈仙寺字南松馬鹿353-3・6

調査期間 1996年8月22日～6月5日

調査面積 60㎡



調査区位置図

靈仙寺遺跡は縄文時代中期以降、様々な時代の遺構遺物を残す複合遺跡である。なかでも本調査地周辺は弥生時代前期の遺構が集中する地点として知られている。

調査では耕土直下、黄灰色砂礫層上（標高91.00m）で、現在の中ノ井川の旧河道北岸を確認し、一部ほりこみ調査を実施した。

河道跡は、深さ2m以上を測り、黒灰色系

の埋土の堆積から成る。出土遺物には平安期以降の土師器小皿片がみられた。

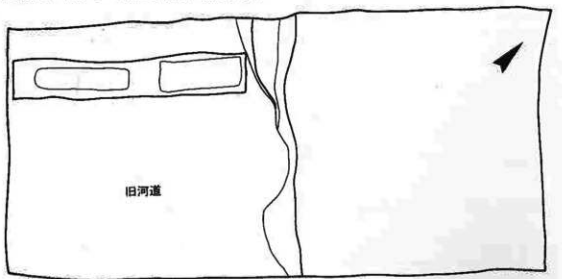
（大崎）



調査風景（南方向）



旧河道ほりこみ（南西方向）



調査区平面図

② 縄 遺 跡

調査地点 北中小路 2-6

調査期間 1996年 8月 6日～9月 1日

調査面積 110㎡



調査区位置図

縄遺跡は弥生時代後期以降、中世に至る遺構遺物の知られる複合遺跡である。中でも本

調査区周辺には中世環濠集落（14世紀）の掘りが知られており、今回の成果もそれを再確認する結果となった。

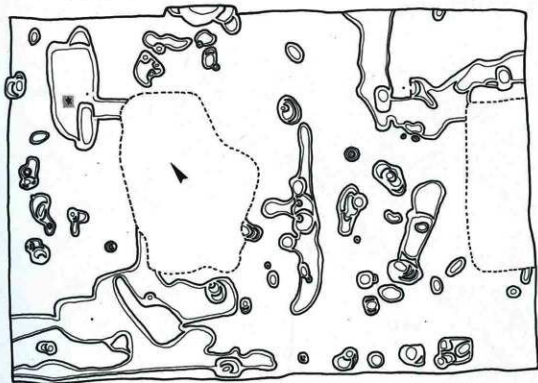
遺構は標高94.30mにあり、建物柱穴ピットや土坑などが見られた。

出土遺物は黒色土器、土師器、白磁（はくじ）等のほか、古銭数枚がある。

（大崎）



調査区全景（南東方向）



0 5 m

調査区平面図

③ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字糺961他

調査期間 1996年5月7日～1996年10月25日

調査面積 2,730㎡

今回の調査対象地は、JR東海道びわこ線栗東駅東口駅前土地区画整理事業の商業区域の整理事業完了区域にあたる。今回の調査は、民間の店舗建設計画に伴う発掘調査である。

調査にあたっては、旧地形に合わせ1～4のトレンチを設定した。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の4層である。上層から、層厚70～90cm程の区画整理整地層、層厚25cm程の旧耕作土、中世期遺物を包含する層厚10cm程の黄灰色砂質土層、そして、中世遺構基盤層である灰色粘性シルト層の地山層である。

遺構の検出にあたっては、地山層である灰色粘性シルト層で行った。

遺構 検出した遺構は、主として鎌倉時代初めの掘立柱建物・柵列・区画溝・土坑の他古墳時代以前の掘立柱建物・溝等がある。

遺構番号は各トレンチごとの通番とした。また、掘立柱建物・柵列等は、それらを構成する柱穴の遺構番号の最も若いものをその遺構番号にあてた。

以下、1～3のトレンチの主要遺構について、その概要を述べることにしたい。

(1 トレンチ)

掘立柱建物 SB01 柱間距離2.2m程 2間×4間以上を測る東西棟建物。柱穴は、一辺0.6m・深さ0.1～0.2m程を測る隅丸方形掘方である。後世の削平のため柱穴の遺存状況は悪く、東側のいくつかの柱痕跡は、かろうじて柱圧痕で確認できたにとどまった。各柱穴から土器細片・木片・スミ等が出土しているものの、時期を決定できるものはない。しかしながら、柱穴の規模・位置等からは、少なくとも古墳時代以前のものといつてよいだろう。



調査地位置図

櫛列SA12 柱間距離2.4m程4間以上を測る
東西方向の櫛列である。柱穴は、一辺0.4m・
深さ0.1~0.2m程を測る隅丸方形掘方である。

2トレンチの掘立柱建物SB10・30、3ト
レンチのSB02と、同時期のものと推察される。
その他の遺構 掘立柱建物SB01西側の「L」
に延びる溝は、検出長12.5m・幅0.2~0.4m・
最深0.4m程を測る。旧地表面の違いから、
1トレンチ西壁際では、トレンチの遺構検出
面より0.2m程高い位置で検出している。

調査地と西接する過去の調査では、地山層
において、後世に著しい削平を受けた弥生時
代の方形周溝墓・土坑等が、鎌倉時代初めの
建物とともに検出されている。今回も状況的
に、同様の様相を示すものと考えてよい。

(2トレンチ)

掘立柱建物SB10 柱間距離2.4m程2間×2
間を測る総柱棟建物。柱穴は径0.3m・深さ
0.2m程を測る円形掘方である。

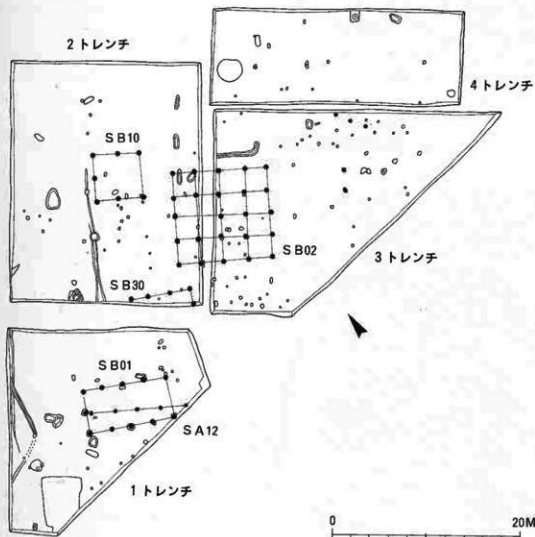
掘立柱建物SB30 柱間距離2.4m程、1間以
上×3間以上を測る東西棟建物。柱穴は径
0.3m・深さ0.2m程を測る円形掘方である。

状況的に、この2棟は後述する3トレンチ
掘立柱建物SB02に付属するものと思われる。

(3トレンチ)

掘立柱建物SB02 柱間距離2.5m程4間×4間
を測る総柱棟建物。柱穴は一辺0.3~0.4m・深
さ0.2~0.4m程を測る隅丸方形掘方である。

柱穴(SK12)から出土した土器等から、
概ね13世紀のものであると考えられる。



遺構配置図

遺物 出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・瓦質土器の他、須恵器の円面硯・近世陶磁器等コンテナー1箱程がある。量的にはそのほとんどが、中世遺物包含層から出土したものである。また、遺構出土のものも含め、その残存状態は概して悪く細片のことが多い。

しかし、1トレンチSK15から出土した須恵器の円面硯は注目してよい。口径6.5cm器高1.4cmを測る小型の三足円面硯である。

SK15そのものは、掘立柱建物SB02の北西隅柱穴と重複した柱穴である。さらなる遺構の検出に努めたが、残念ながら建物等の確認には至らなかった。とはいえ、後述するように掘立柱建物SB02一群の建物構成からは、このような遺物の出土は十分に想定してよい。他の出土遺物についても、日常雑器等以外の特殊品ではなく、一般的に集落遺構で出土するものである。この円面硯のみが、二次堆積のものとは考えられない。

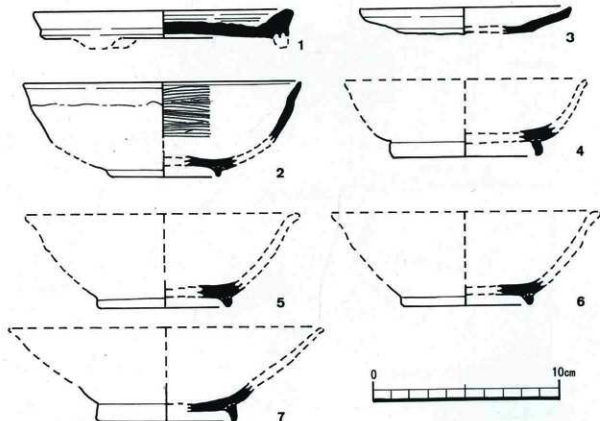
まとめ 主要遺構について、概要を述べた。ここでは、若干の整理を行いまとめとしたい。(遺構の性格)

鎌倉時代の遺構としては、状況的に掘立柱建物SB02を中心とし、それに付属する掘立柱建物SB10・SB30と柵列SA12が想定された。

特に、掘立柱建物SB02については、柱穴の検出状況から見ると、建物中央部分のみ柱穴の重なりが見られることから、その部分に改築が行われたことが理解される。このことを積極的に理解すれば、建物配置および改築の有無等から、これらは、母屋と倉庫といった有機的な関係を想定してよいだろう。

前述のとおり、西接する駅前の調査地では、鎌倉時代初めの建物が数棟検出されている。以前にも検討したが、前回と同様の様相をなすこの状況からは、この頃には少なくとも、当調査地周辺においても散村集落が経営されていたと理解してよいだろう。

今後の調査成果に期待したい。(狼向)



出土土器実測図 (1 : 1 トレンチSK15、3 : 3 トレンチSK12)



1 トレンチ完掘状況（北から）



3 トレンチ完掘状況（北から）



1 トレンチ S B 01 完掘状況（南東から）



3 トレンチ S B 02 完掘状況（北から）



完掘状況全景（南西から）

④ ⑤ 野尻遺跡

調査地点 糺字天堂52-2

調査期間 1996年7月1日～7月29日

調査面積 555㎡

調査地点 糺字海道田440

調査期間 1996年7月1日～7月29日

調査面積 276㎡



調査区位置図

野尻遺跡は縄文時代晩期以降、様々な時代の遺構・遺物を残す複合遺跡である。特に弥生時代以降は、この地域の中核的な遺跡であ

る下鈎遺跡や伊勢遺跡に隣接し、その生産域としての機能・役割を果たした遺跡として把握されており、今回の調査もそれを再認識させるものとなった。以下にその概略を記述する。

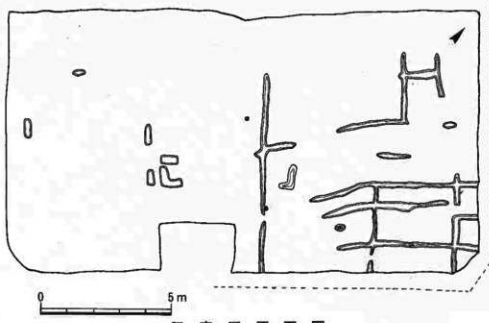
遺構は耕土直下、標高96.60mで確認された。幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mの小溝や、径0.3mの土坑状遺構が見られる。

小溝は一般に耕作痕として知られるものであり、中には緩やかなカーブを描くものも見られる。

出土遺物は、平安時代以降の土師器や黒色土器片が大半である。(大崎)



調査区南東部(南西方向)



調査区平面図

⑥ 下 鈎 遺 跡

調査地点 下鈎字高田722-1 726-1

調査期間 1996年10月1日～10月22日

調査面積 200㎡



調査区位置図

下鈎遺跡は縄文時代前期以降、各時代の遺構遺物を残す複合遺跡であり、とりわけ弥生時代のそれは隣接する小柿・中沢遺跡を含めこの地域の拠点の集落として知られている。

今回の調査地は、弥生遺構群と縄文遺構群の拡がりに挟まれたその中間地にあたる。

調査では、耕土直下（標高97.60m）に広がる褐色ブロック混じり黄灰色整地層下で大規模な旧河道跡を確認し、一部ほりこみを実施した。

河道跡は、全体の規模等明瞭でないが、北西方向に流れをとる。埋土はいずれも灰色系の砂礫や砂層の互層から成り、奈良～平安時代の須恵器片などが出土している。

（大崎）



整地層断面



旧河道ほりこみ風景



調査区平面図

⑦ 下 鈎 遺 跡

調査地点 栗東町大字下鈎字舟場1746

調査期間 1997年10月1日～10月18日

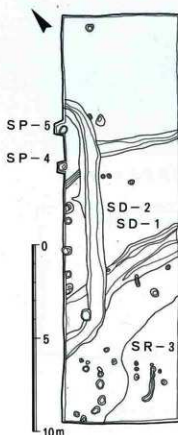
調査面積 120㎡

下鈎遺跡は、縄文時代から近世に至る複合遺跡である。

一般には、弥生時代的大型堀立柱建物の存在で知られるが、中世の遺構も顕著に検出されており、12世紀代を中心としている。



調査区位置図



調査地遺構図

調査地は、下鈎甲集落の北西約30mの地点にあり、現状は田地である。

基本層序：層厚15cmの暗灰色粘質土（耕土）の直下に、黄色系粘質土の遺構面（地山）が存在する。

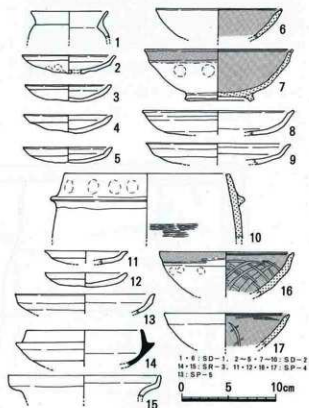
主要遺構：調査区の遺構は、古墳時代と中世に大別できる。以下、遺構毎に概述する。

SD-1：幅1.8m、深さ40cmを測る。12世紀代の黒色土器が出土した。

SD-2：幅1m、深さ21.6cmを測る。12世紀後半から13世紀代の黒色土器が出土した。

ビット：SD-2の西側と、トレンチ南側に群在する。SP-4・5は、12世紀後半～13世紀代の遺物が出土した。ビットは、直径40cmとそれ以下の規模に大別できる。直径40cmのビットは、SD-2の西側に集中し、区画溝SD-2を持つ屋敷があったと思われる。

SR-3：検出幅3m以上、検出深1.2mを測る。3から6世紀代の遺物が出土し、調査地内で最も古い遺構となる。（藤岡）



出土遺物実測図 (S=1/4)

⑧ 蓮台寺遺跡

調査地：栗東町大字下鉤782・783・784

調査期間：1996年7月15日～9月10日

調査面積：400㎡



調査地位置図

はじめに

蓮台寺遺跡は、かつて蓮台寺が存在していた。蓮台寺は『近江栗太郎志』によると、延暦8年(789年)に最澄によって創建された天台宗寺院とされる。もとは、調査区北西側の「宇森の丸」に本堂があり、三町四方の寺域を誇ったが、兵火などで次第に寺域が縮小し、過去の調査も勘案すると、慶長年間には、25×30mの寺域に収まったようである。

建築物は江戸時代も度々火災を受けている。

図3は明治期の蓮台寺の地図であるが、排仏毀釈や台風などで、多くの建築物は失われ、平成元年には小堂(仮本堂)も取り壊され整地された。

1990年度の調査は、寺域の北側、墓地跡周辺で行われ、5世紀から近代に至る遺構が検出された。

寺院復元に関係する遺構では、大溝・整地層・整地層上のピットがあり、13世紀後半から15世紀代に位置づけられている。大溝は整地層を区画するもので、13世紀後半以降に、現在の境内画定に連なる区画が形成されたと思われる。

今回の調査区は、蓮台寺旧境内の中心部に設定した。

基本層序

基本層序は上層から順に、層厚30cmの黄褐

色砂礫層(ガラスが混入した、平成期の整地層)。層厚25cmで、近世から近代の遺構面で、第2遺構面の包含層となる、黒褐色粘質土。層厚13cmで、第2遺構面の地山、第1遺構面の包含層となる、暗黒褐色粘質土(礫混入)を経て、礫層上に暗黒褐色粘質土がまばらに堆積する第1遺構面の地山となる。

第1遺構面の直下は礫層で、1m掘削したが、同一地層であった。遺構面を形成する埋土は、単色の堆積で、平坦な面をなすため、整地層として埋められたと考えられる。

遺構の概要

第1遺構面：検出遺構中、最も下層にある。

遺構面からは、図3-17のように7世紀代の須恵器を検出した。当該期の遺構は調査区から確認できなかったが、1990年度の調査では、古墳時代の周溝状遺構が検出されている。

遺構は、ピットと小溝(SD-1)を検出した。遺構の多くは、暗黒褐色粘質土を埋土とし、P-36の「ての字口縁状土師皿」(図3-8～16)の出土から、10世紀中頃から11世紀初頭に位置づけられよう。SD-1は時期を特定できないが、東西方位に近い。

第2遺構面：遺構面からは、ピット・土杭・小溝を検出した。建築物については、第1遺構面と同様、詳細は明らかにし得なかった。

遺構の埋土は、黒褐色粘質土が多い。出土遺物は、10世紀後半から11世紀代と思われ、第1遺構面廃絶直後に、整地・築造されたと考えられる。遺構面の下限は、墓石廃棄土坑に五輪塔残欠が存在するため、中世期である。

第3遺構面：遺構面からは、仮本堂・鐘堂の基壇以外に、あまり遺構は認められない。

仮本堂・鐘堂は平成期の整地土で埋められていた。仮本堂は土造りの基壇、鐘堂は石垣造りであった。鐘堂の石垣は、粘質土を積み上げた基壇を、囲む形で石垣が組まれる。裏込めは少なく、表面の石も一重しかない。

出土遺物は少量で、遺構の年代を特定し難いが、鐘堂の基壇上からは、近世から近代の

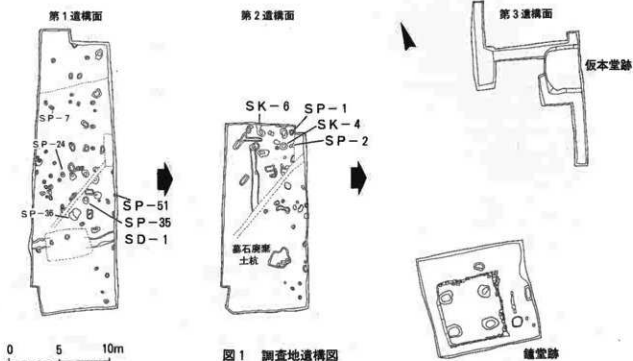


図1 調査地遺構図

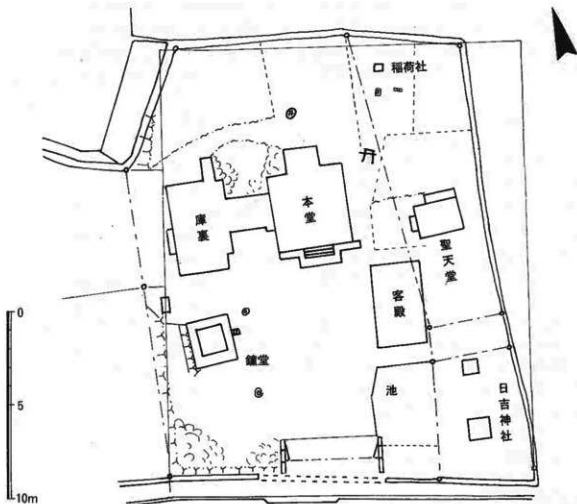


図2 蓮台寺境内図 (明治期)

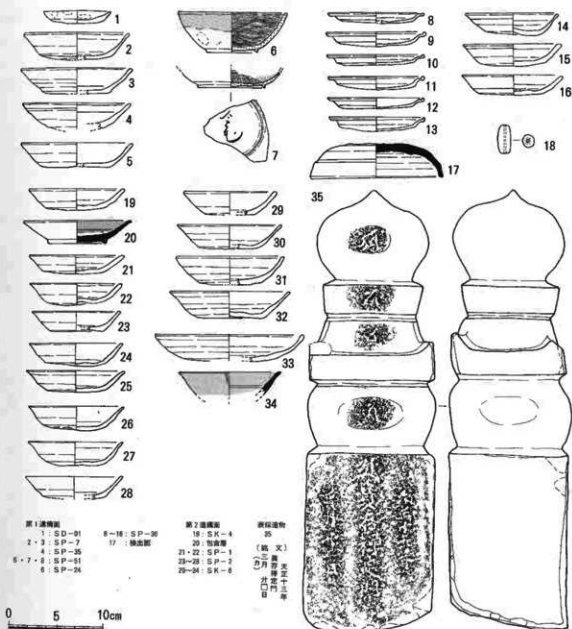


図3 出土遺物実測図

瓦が出土した。

まとめ

今回の調査では、3面の整地層に、それぞれ遺構を確認した。特に、現在の境内地に続く13世紀以前の遺構を検出することができた。

第1遺構面は、小溝とピットの確認に留まったが、第2遺構面では墓石廃棄土壌を確認し、鎌倉時代以降は、現在の境内地に寺院の存在を想定できた。今後は、未確認の平安時代の中心伽藍解明が待たれる。(藤岡)



第2遺構面SP-2出土土師皿

⑨ 手原遺跡

調査地 栗東町手原7丁目7-828

調査期間 1996年9月17日～1997年1月17日

調査面積 817㎡



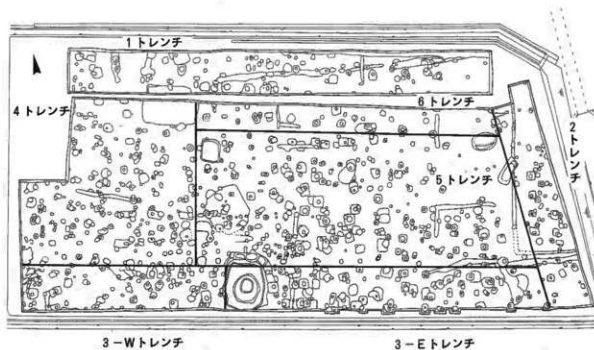
調査位置図

はじめに 手原遺跡は、東から西へ緩やかに傾斜する標高105m程を測る旧野洲川が形成した扇状地上に立地する。過去の調査からは、古代から中世にわたる遺構・遺物が確認されているものの、基本的に2つのことなる性格をもつ遺跡であることが周知されている。

一つには、奈良時代後半期において、規模・企画性ともに一般的な集落を凌駕する遺構・遺物が確認されている。これらの遺構群は、周辺地域とことなる正南北方位の条里に規制された企画配置から、寺院が付属した官衙的性格の強い遺跡として推察されている。

もう一つは、その遺構群の衰退とともに形成されていた中世期の集落が、その立地条件から発展・拡大したことが確認されている。

調査にあたっては、造成工事計画の都合上、調査対象地周縁の擁壁工事予定部分に1～3のトレンチを、そしてそののち、その中心部分に4～6トレンチを設定した。

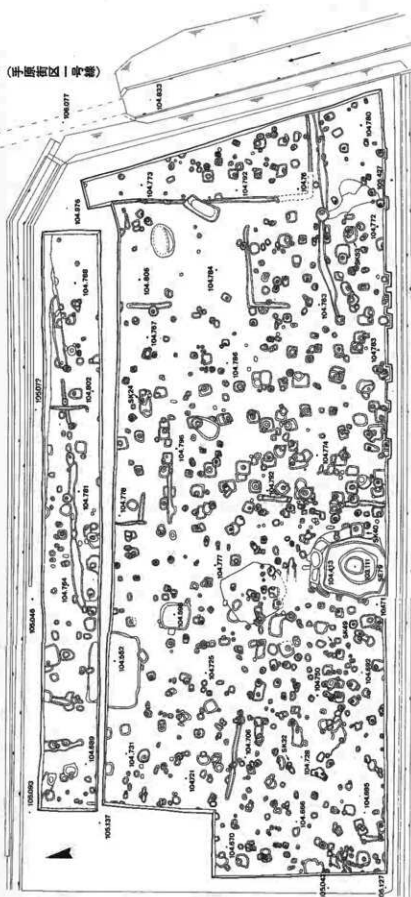


トレンチ配置図

町道（手取街区3号線）

105.306

町道（手取街区3号線）



工場
連絡平面図



層 序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の4層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土、中世遺物包含層である層厚5～10cm程の灰褐色土層、中世遺構基盤層である層厚5～10cm程の黄灰褐色土層、そして、暗茶褐色土層の古代遺構基盤層である。

遺構の検出にあたっては、調査の都合上、暗茶褐色土層において奈良時代後半期の遺構検出を主眼として行った。

遺構番号については、トレンチごとに上層・下層遺構を一括して、番号を付した。

以下、その主要遺構の概要を述べることにするが、今回は整理作業が未了のため、下層遺構についてのみ報告することとする。

遺 構 中心となる遺構群は、下層遺構の奈良時代後半から平安時代中頃の掘立柱建物・区画溝・柵列・土坑などと、上層遺構の平安時代末から鎌倉時代初期の掘立柱建物・柵列・溝・井戸・土坑・耕作痕などがある。

(下層遺構：遺構配置図1)

・I期 溝を基本区画とする建物群

建物1 柱間距離梁行1.8m・桁行1.5m程、2間×4間を測る南北棟建物。柱穴は一辺0.7m・深さ0.4m程を測る隅丸方形掘方である。

建物2 柱間距離梁行0.9～1.5m・桁行2.0m程、3間×3間を測る東西棟建物。柱穴は一辺0.5m・深さ0.3m程を測る隅丸方形掘方。SK53出土土器より9世紀前後と考えられる。

建物3 柱間距離1.3m程、4間×1間以上を測る総柱建物。柱穴は一辺0.6m・深さ0.4m程を測る隅丸方形掘方である。西・南辺側に柱の中心より約1.5m隔てて区画溝1が付属する。検出長15m・幅0.3m・最深部0.3m程を測る。

・II期 柵列を基本区画とする建物群

建物4 柱間距離2.1m程、2間×2間を測る総柱建物。柱穴は一辺0.7m・深さ0.4m程を測る隅丸方形掘方である。

建物5 梁・桁行とも柱間距離2.1m程、2間×3間を測る南北棟建物。柱穴は一辺0.8m・深さ0.4m程を測る隅丸方形掘方である。

柵列1 検出長24m・柱間距離18～2.4m程、11間以上を測る柵列である柱穴は一辺0.4m・深さ0.3m程を測る隅丸方形掘方である。

・III期 主軸のことなるもの

建物6 柱間距離2.4m程、4間×1間以上を測る総柱建物。柱穴は一辺0.5～0.9m・深さ0.3m程を測る隅丸方形掘方である。

区画溝2 検出長11m・幅0.2～0.4m・最深部0.4m程を測る。これには、北側に約15m離れた区画溝3が対になると思われる。検出長18.5m・幅0.2～0.4m・最深部0.5m程を測る。

これら区画溝2・3については、詳細な遺物検討が未了なため、遺構性格・時期ともに不明ながら、状況的に建物6とほぼ同時期のものと推察してよいだろう。

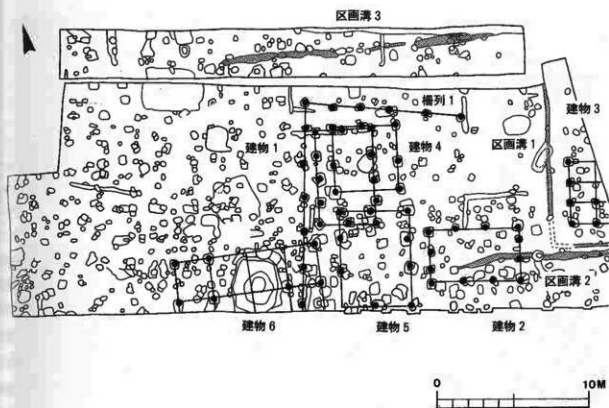
以上のうち、I期とII期については、一部の立て替え造作によるもので、その時期差はさほどないものと考えてよいだろう。

(上層遺構：遺構配置図2)

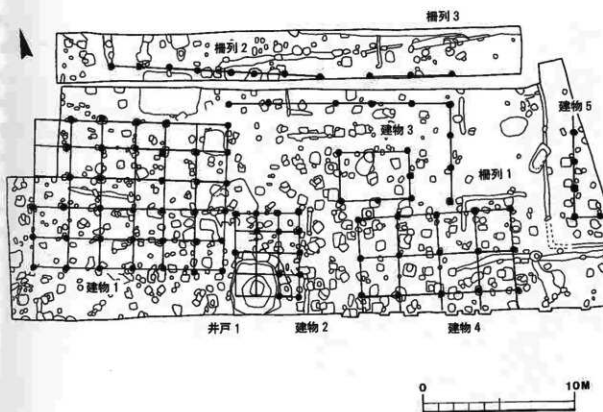
上層遺構については、平安時代末から鎌倉時代初期の掘立柱建物5棟・柵列3列・井戸1基・土坑・溝などがある。ここでは紙面の都合、その詳細は割愛するが母屋・倉庫・柵列・井戸などから構成される住居単位が想定される。

遺 物 遺物については、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などのほか、瓦・鉄器・木器など、コンテナ12箱分程ある。その多くは中世期の土器類である。主なものについては図示したが、その詳細については今回割愛する。

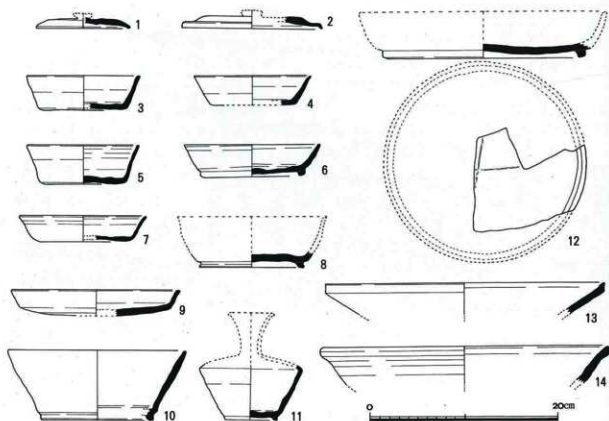
まとめ 調査対象地は、手原遺跡の中心から東側に外れているものの、南接する'93年度の調査からは、多量の炭とともに輪の羽口やガラス滓が円形土坑から出土し、官営工房的な施設の可能性を示唆した。今回の調査では、残念ながら掘立柱建物の北側延長部の確認にとどまったが、今後の調査・検討によって、さらなる手原遺跡の全貌が解明されることに期待したい。(猿向)



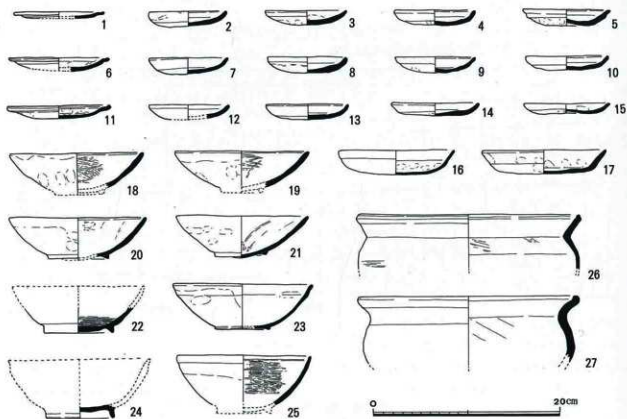
遺構配置図 1



遺構配置図 2



土器実測図1 (6・7: 建物2、13: 建物6、9: 櫓列1)



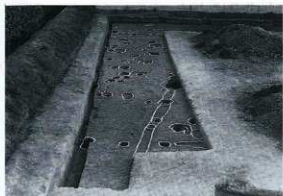
土器実測図2 (2・8・9・17: 建物1、18・19・27: 井戸1)



1 トレンチ完掘状況（北東から）



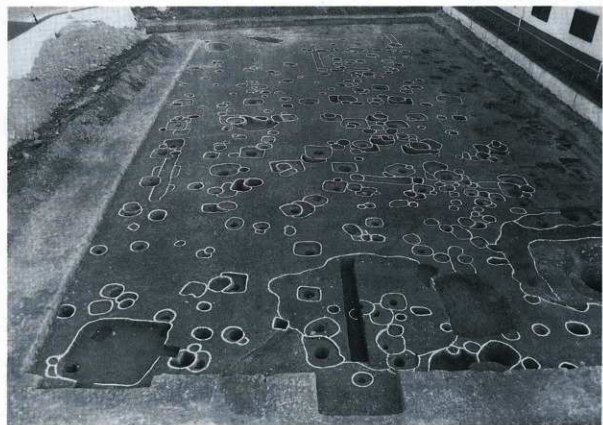
3-E トレンチ完掘状況（北西から）



2 トレンチ完掘状況（北から）



3-E トレンチSK53土器出土状況（南東から）



4 トレンチ完掘状況（西から）

⑩ 手原遺跡

調査地：栗東町大字手原3丁目931-1

調査期間：1996年3月17日～3月21日

調査面積：137㎡

手原遺跡は、栗東町内では唯一の正南北方向の条里地割りを残す地区である。

その範囲は700×400mに及び、過去の発掘調査では、西側は古瓦の散布が、東側は企画性を持つ正南北方向の総柱建物群が確認されており、官衙・寺院の存在が指摘されている。

今回の調査区は手原遺跡の東側にあたる。

基本層序は上層から順に、耕作土（灰褐色

系粘質土）・整地層（明灰色系粘質土に礫が混入）・黄褐色系粘質土があり（3層あわせて層厚約15cm）、この直下に茶褐色系粘質土（遺構面）が存在する。

遺構は古代のビット・溝。近世以降の素掘り溝を確認した。中世期の遺構は未確認だが遺構検出面より瓦質土器・すり鉢を確認した。

ビットは数が少ないため、建物規模は不明であるが、7～9世紀代の遺物を確認した。

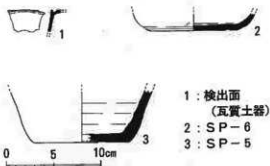
柱穴に先行する遺構は重複関係からSD-1が存在する。時期を特定する遺物は未確認だが、磁北により25度北東に傾くため、正南北方向の建物・地割りに先行する地割りが存在したと思われる。（藤岡）



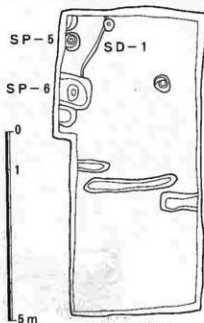
調査地位置図



調査地全景



出土遺物実測図 (S=1/4)



調査地遺構図

⑪ 下鉤東遺跡

調査地：栗東町大字上鉤上教田172-1178

調査期間：1996年4月17日～5月31日

調査面積：440㎡



調査地位置図

下鉤東遺跡は、弥生時代から室町時代の複合遺跡であり、奈良時代と室町時代が遺構の主流となる。東隣には、正南北方位の建物群・地割りが検出され、瓦などの出土から、寺院・官衙の存在が指摘される手原遺跡が位置する。

下鉤東遺跡は、現在の景観は栗太郎主条里の地割りを残すが、1994年度の調査では、奈良から平安時代頃の正南北方位の溝と中世以降の条里地割りに規制された小溝群が検出されている。このことから、下鉤東遺跡は、奈良から平安時代頃に隣接する手原遺跡の地割りと何らかの関係があったと思われる。

奈良から平安時代において、律令制度を担う政治的な性格の強い遺跡は、手原遺跡や栗太郎衙の可能性が指摘される岡遺跡の他に、官人が居住したとされる狐塚遺跡が、手原・岡遺跡に挟まれて存在する。

本調査地は、下鉤東遺跡の中で最も南端にあり、手原遺跡と狐塚遺跡を結び、古代の交通路推定ライン付近に位置し、東南20mの地点には近世東海道がはしる。

調査地は建設物の設計変更の関係で、1995年度調査地に接続する形で設定した。

先年度の調査では8から11世紀代の掘立柱建物や溝・池を検出し、特に9世紀代を主流としている。

基本層序

確認した基本層序は上層から順に、層厚20cmの灰褐色系粘質土（耕作土）、近世の遺構が存在する層厚30cmの黄色系粘質土、遺構面となる茶褐色系粘質土（地山層）である。

検出遺構の概要

検出した遺構はビット群と旧河道である。

ビット群は6列、それぞれ5～16mの長さの間に、ビット列を展開される。

ビットは大別すると、円形と溝状の形状に大別できる。円形ビットの大部分は直径30～40cm、深さ5～10cm。溝状は幅30～40cm、深さ約20cmである。ビットは30～50cmの間隔で並んでいる。

図3は、ビット列北側の断面図である。埋土は灰色系粘質土のみが大部分で、黒褐色系粘質土などを含む物もあるが、埋土の状況から、各ビットの存続時期は短いと思われる。ビット列は、時期を判別する遺物に恵まれなかったが、南東側の一部で重複関係があり、数時期にまたがる。

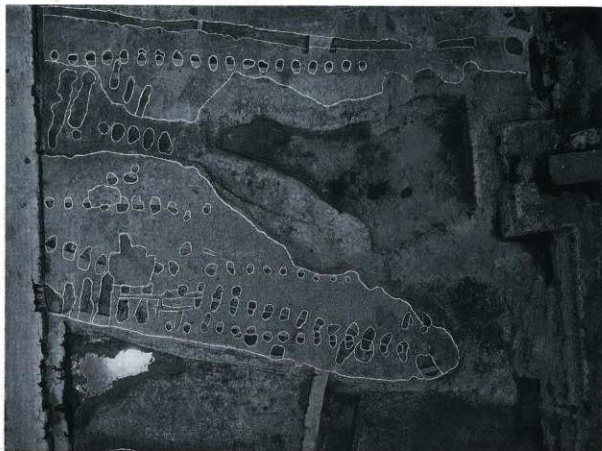
ビット列の北側には、北側ビット列と併行する形で小溝がはしる。埋土はビット列と同一である。小溝はビット列に伴っていた可能性はある。

北側ビット列の南には、落ち込みが存在する。落ち込みは、砂質土状の堆積土があり、これを除くと、検出深10cmから、落ち込みに挟まれた溝状のビット列を検出した。

落ち込みの埋土は、当初、旧河道に伴うものと考えていたが、落ち込みは安定した平坦面を形成し、東側は旧河道に切られている。ビット列の埋土には砂質土の堆積はなく、落ち込みに伴う堆積土と思われる。

旧河道は検出幅5m、深さ1mを測る。埋土は大別すると①白色砂質土（最終段階）・②灰褐色粘質土・③青灰色粘質土（下層）に分けられ、①からは隆平永宝が出土している。

出土遺物は、8世紀後半から12世紀に及ぶ。旧河道は、時期の特定に難があるビット列に



調査地全景

後出することから、ビット列はそれ以前に存在していたと指摘できる。

まとめ

ビット列は、形状・配列から、古代計画道路の建設で用いた「波板状凹凸面」と考えられる。ビット列は8世紀後半以前に設置されたと思われ、1995年度調査の溝・建物に先行している。今後は調査区周辺の律令期の遺構展開を解明する必要がある。(藤岡)



ビット列（落ち込み）完掘状況

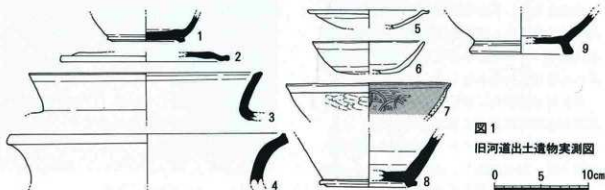
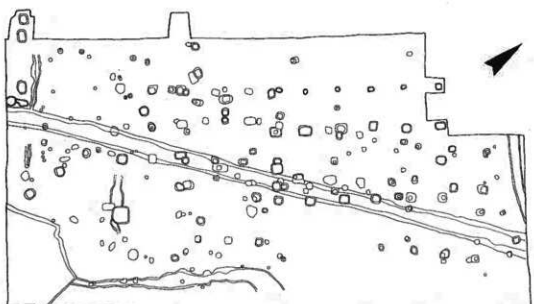


図1
旧河道出土遺物実測図



平成7年度調査区



図2
遺構平面図



平成8年度調査区

KBM
97.3m

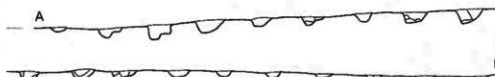
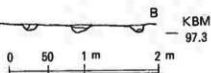


図3
ピット群断面図



⑫ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻西八王寺・東八王子
調査期間 1996年4月1日～1997年3月31日
調査面積 約4,100㎡

今回報告する調査は、1993年度から開始された辻・小坂西部土地地区画整理事業に伴う第4次発掘調査の成果である。

トレンチは、1994、1995年度発掘対象地(A・B区)の残存部分T A13、T B11～14と、今年度発掘対象地区(C区)T C1～9の計14ヶ所を設定した。

遺構・遺物の時期区分は、1993年度に設定したⅠ～Ⅶ期区分を用いる。Ⅰ期縄文時代、Ⅱ期古墳時代(4～6世紀)、Ⅲ期飛鳥・白鳳時代(7世紀)、Ⅳ期奈良時代(8世紀)、Ⅴ期平安～安土桃山時代(15～16世紀)、Ⅶ期江戸時代以降(17～20世紀前半)

(T A13) トレンチA13では、上層面で1994年度調査で確認された土探り土坑(Ⅶ期)の続きを確認したのみであるが、下層では地震跡(噴砂)と、縄文時代前期と考えられる遺物を包含する面を確認した。噴砂は2ヶ所で確認されている。その内ひとつは、調査区

の西側中央付近から南側に向かって延び、二股に分かれている。検出長は約7.7m、最大幅25cmである。断面観察によれば、縄文時代前期の遺構面を切っているが、古墳時代以降の生活面に達していないので前回同様に、縄文時代前期以降に形成された地震跡ということしか判断できない。縄文時代の遺構は明確なものを確認していないが、遺物としては石錘、サヌカイト剥片が出土している。

(T B11) トレンチB11では、Ⅱ期前半の堅穴住居(S H31)と1994年度に調査されたⅡ～Ⅶ期の旧河道(S R1101)の北側肩部を確認した。また下層では、Ⅰ期(縄文時代後期)の土器溜まりが確認されている。S H31は旧河道に一部切られるため全容は明らかではないが、残存部分では周囲に壁溝を巡らし、炉が一部認められた。残念ながら柱穴については明確ではない。

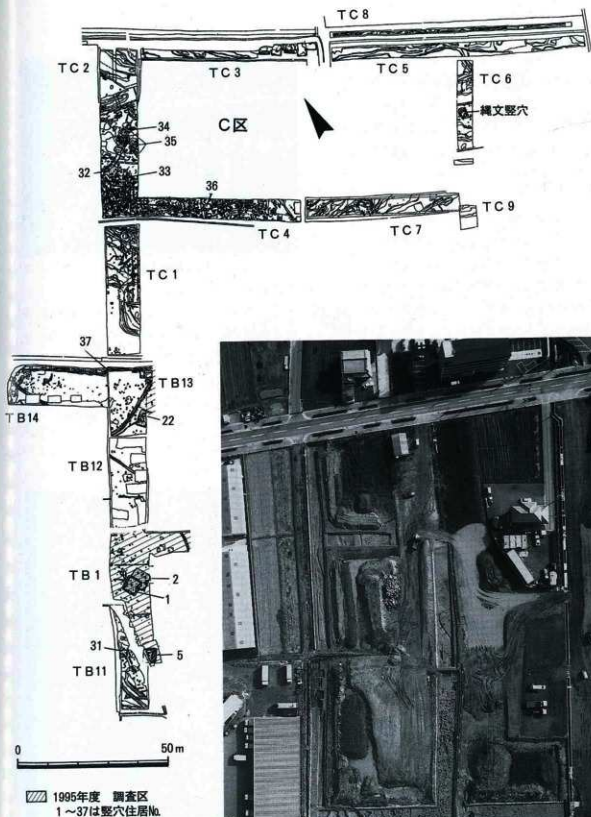
(T B12) トレンチ12は、Ⅶ期の土探り土坑が多く認められるが、それ以外の遺構は比較的少ない。昨年度調査T B2・S D201の続きと考えられる溝(Ⅱ期前半)が南から北方向へ向って延びる以外は、ピットがわずかに認められる程度である。

(T B13) トレンチ13では、Ⅱ期の堅穴住居(S H22)、東から西へ向かってややカーブを描きながら延びる溝(S D1301)の他、Ⅱ期に含まれる可能性があるものとして、2間×1間の掘立柱建物(S B1302)が存在する。S H22およびS D1301は、昨年度調査区(T B8)から続く遺構である。Ⅴ期としては、東から南にかけて掘立柱建物が3棟以上存在している。

(T B14) トレンチB14では、Ⅱ期前半の掘立柱建物(S B1401)と同じく弧状に屈曲する溝状の土坑(S X1401)と、S D1301に続くと考えられる溝(S D1401)がある。この他Ⅴ期の掘立柱建物とⅥ～Ⅶ期と考えられる溝(S D1402)が存在する。S D1401は、2間×1間の西側がやや開く台形状をしてお



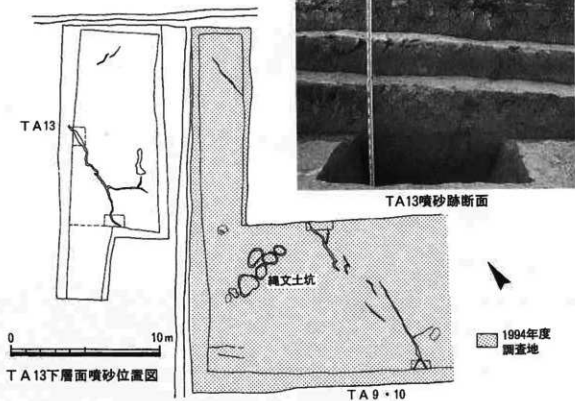
調査地位置図



調査地遺構図



C調査区全景（上空より）



TB14 SB1401とSX1401遺物出土状況



TB2・4作業風景（西から東をみる）

り、柱穴は非常に小さい。周囲には塀や柵のようなものに復元できるビットも存在する。通常の倉庫や住居用建物とは性格を異にするものではないかと思われる。また西側に隣接するSX1401からはまとまった土器が出土し、その中には日常的にあまり使用しなかったと思われる大型の土器が含まれている。両者の遺構がセットになって存在していたとすれば、住居址群内での共同で利用する祭祀に関連する建物であった可能性も考えられる。

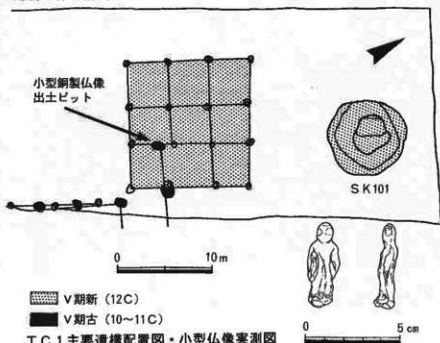
(TC1) トレンチC1では、Ⅱ～Ⅲ期の旧河道、Ⅲ期の方形状に巡る溝(水路)、Ⅴ期の掘立柱建物、井戸状土坑、耕作痕等が確認されている。Ⅱ～Ⅲ期の旧河道は、南から北方向へ流れているが、先年度に行なわれた周辺の調査状況から、西から延びてきた旧河道がC1トレンチの西側で大きくカーブを描いて北へ流れを変化させていることが考えられる。その後、この時期の旧河道や溝が完全に埋まってから、Ⅴ期の掘立柱建物や井戸状の土坑(SK101)が出現する。Ⅴ期の掘立柱建物は大きく2時期に分けられ、古い段階のものは10世紀後半～11世紀前半、新しい段階のものは12世紀代に比定されよう。注目すべきものとして、古段階の建物に伴う柵列の

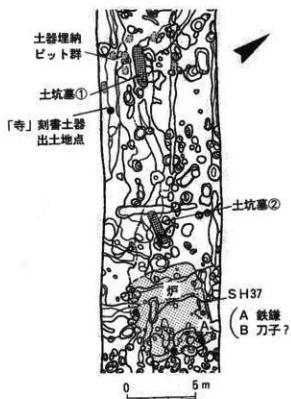
ビットから小型の銅製如来立像(高さ4.5cm、最大幅1.7cm)が出土した。井戸状土坑は、径約4m、深さ1m以上の規模をもち、木枠や曲物等の施設は確認されなかった。時期は出土遺物より12世紀中～後半頃と考えられる。

(TC2) トレンチC2の南側は、建物に伴うと思われるビットが集中し、現段階では3棟の掘立柱建物(Ⅲ～Ⅴ期)が確定できている。Ⅲ期後半の掘立柱建物は、3間×1間のプランをもち、主軸をほぼ正南北にとる。一方中央から南側にかけては、Ⅲ期と考えられる堅穴住居(SH32～35)が4棟存在する。後世の土採り土坑に切られているため残りが良好ではないものもあるが、焼土の位置からいずれもカマドをもつタイプの堅穴住居であることが判断できる。SH32、33は、煙道が壁より外に突出するタイプのもので、SH33では、カマドの支脚に土師器の高杯が使用されていた。柱穴の存在は4棟とも明確ではない。トレンチの北方面は、旧河道と溝で占められ、南から北方向へ延びるものと、支流として西方向へ延びるものがある。また前述したビット群の南端にも、Ⅱ～Ⅵ期の旧河道が存在している。



TC1 小型銅製仏像出土状況

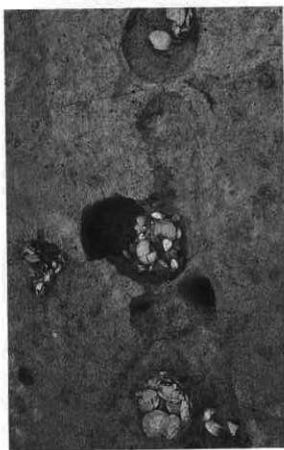
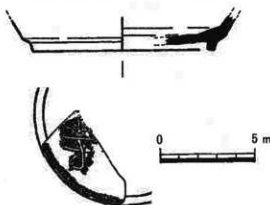




T 4 主要遺物出土地点位置図



「寺」刻書土器 (写真下実測図)



TC4 土器埋納ビット群



TC4 土坑墓①遺物出土状況

(TC3) トレンチC3では、Ⅲ～Ⅶ期の旧河道が全体を占め、Ⅶ期の土採り土坑が南東隅に連続して確認されている。土採り土坑は、鑄造に関連した遺物をはじめ、瓦や陶磁器類が多量に出土している。

(TC4) トレンチC4は、TC2の南側から続くトレンチで、Ⅱ期前半の竪穴住居(SH36)、Ⅲ期に埋まったと考えられる溝(水路)、Ⅴ期のピット群等が存在する。SH36は、4.5×4mの大きさをもつ方形の竪穴住居である。周囲に壁溝を巡らし、中央やや西寄りに炉が存在する。東辺寄りに鉄鎌と刀子もしくは鉄鎌?が意識的に左右対象に置かれた状態で出土した。何らかの祭祀行為が行なわれていた可能性がある。また、Ⅲ期前半の土坑墓が2基確認されている。木棺の痕跡は認められなかったが、遺物は比較的良好に残存していた。TC2との境目付近では、土師器の皿や杯を多量に埋納したⅤ期のピットが集中して確認されている。その内、2ヶ所のピットから銅銭と一緒に埋納されていた。注目すべき遺物では、「寺」と刻書された須恵器の杯(Ⅵ期後半)や朱の入った須恵期の壺(Ⅱ期後半)が出土している。

(TC5) トレンチC5では、前面がⅢ～Ⅶ期の旧河道である。特に南東隅が深くなっていく傾向が認められる。

(TC6) トレンチC5同様にⅢ～Ⅶ期の旧河道で大半を占めるが、中央付近でⅠ期の不整方円形状プランをもつ竪穴住居が確認さ



TC6 Ⅰ期竪穴住居

れている。大きさは約2.8×3.6m。深さは検出面より2～10cmである。明確なピットは認めないが、周囲に壁溝が認められる。また炉が存在したか否かはわからないが、竪穴住居周辺も含めて3ヶ所で焼土が確認されている。縄文土器とサヌカイト剥片を少量出土したが、縄文時代のどの時期にあてはまるのかは残念ながら判断できなかった。

(TC7) トレンチ7では、Ⅱ～Ⅴ期の旧河道、土坑と、Ⅴ期後半の溝(SD701)等を確認した。SD701は、調査区中央付近で確認されている。もともと旧河道であった所がほぼ埋まった後に、L字状に屈曲する溝として変化したものと考えられる。農業用の水路として機能していたことが推測される。調査区の北端では、Ⅴ期の土坑穴落ち込みが確認され、多量の遺物が出土している。

(TC8) トレンチC8は、TC5同様に前面が旧河道におおわれている。調査区南東隅では、Ⅶ期(明治～大正もしくは昭和前期)まで下がる可能性ありの溝から、細い杭が列状をなしてい確認されている。

(TC9) トレンチ9は、旧河道の一部を確認したのみである。遺構が存在しない部分は、通常の黄色粘土層のベースではなく、茶褐色系の砂や礫を含んだベースが広がっている。

最後に問題点をひとつあげておこう。TC1では出土した平安時代の小型銅製如来像の存在は、昨年度の調査で出土している八鏡鍔や1987年度調査で出土した銅印も含めて、当時の有力層がこのあたり一帯に居住していたことが推定できる。しかしこれらの遺物は寺院関連の遺跡から出土する例が多く、平安時代より前の奈良時代に「寺」と線刻された土器が出土していることから、寺院と関連が強い地域であったことが想像でき、この土地に残る「西八王寺」という字名も合わせて、今後寺院の存在について積極的に追求していかねばなるまい。(近藤)

⑬ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻字南ボケ塚上529-1

調査期間 1996年5月15日～6月13日

調査面積 200㎡



調査地位置図

辻遺跡は隣接する高野遺跡、岩堀遺跡とともに野洲川流域を代表する古墳時代の大集落である。国道8号線辻交差点付近を中心にこれまでに300棟以上の竪穴住居が調査されていて、先年度の調査では4世紀末から5世紀初頭の碧玉製玉造工房も検出されている。当調査地は集落の中心地では無いものの、比較的遺構密度の高い地点である。



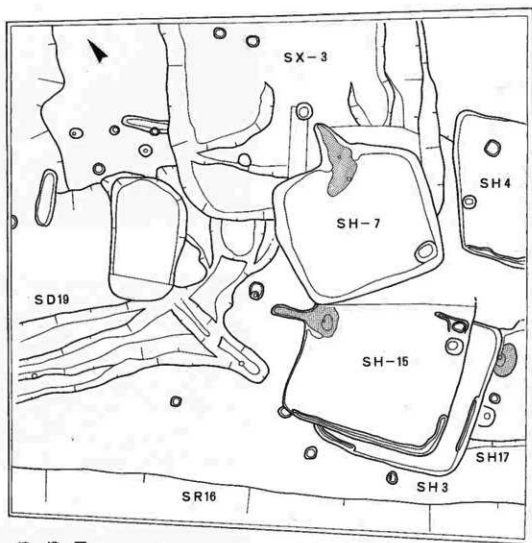
調査地は、運送会社の駐車場で地下タンク埋設に先立ち実施した。基本層序は上層から1.1mの盛土、0.2mの水田耕作土、0.15mの黄灰色床土を経て、黄色粘質土の地山遺構面に至る。検出遺構は、竪穴住居、土坑、溝等である。SX3は7×5m以上深さ約0.7mの土坑で、最下層から5世紀末の土師器が出土(1・2)した。竪穴住居は5棟検出され、そのうち4棟は重複している。いずれも一辺約4mと小規模で主柱穴をもたない構造である。切り合い関係で最も新しいSH7は4×3.5m、深さ0.6mで、カマドに対面する東側コーナー部分に深さ0.3mの屋内土坑(貯蔵穴)をもつ。支柱石を残すカマドからは7世紀代の土器が出土(5・6)した。またSH7からは滑石製の臼玉(12)が出土したが、北東側隣接地の先年度調査で4世紀末から5世紀初頭の竪穴住居内で滑石チップや有孔円板、砥石が出土するなど、周辺に滑石製品の工房が存在するためだろう。

辻遺跡を含めた栗東町域の遺跡では7世紀には掘立柱建物が増加するが今回の調査のように小規模な竪穴住居の検出例が増加している。掘立柱建物との位置関係などからその性格を考えねばならない。(佐伯)

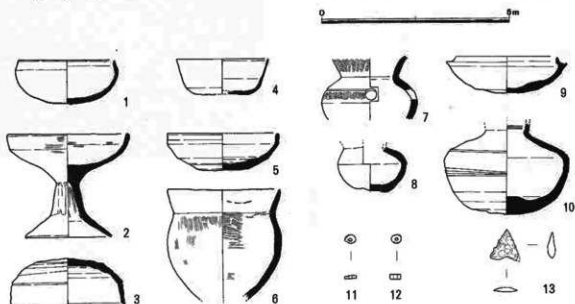


▲ SHO7カマド

◀ 南西側調査区(南東から見る)



遺構図



出土遺物実測図 (土器S=1/4、玉・石磁S=1/2)

1・2 (SX3) 3~7、12 (SH7) 11 (SH4)
8 (SR16) 9・10・13 (SD19)

⑭ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字出底字かしあげ471-1

調査期間 1996年7月16日～9月11日

調査面積 569㎡



調査地位位置図

本調査地は、古墳時代の大集落として知られる辻遺跡の集落域西端付近に位置する。92年度に南西約150mで実施された調査では布留式併行期の前方後方型周溝墓2基が検出されている。

今回の調査は造成工事道路部分で実施したため幅約5m、長さ84mの調査区となった。遺構図は調査区北半部をA区、南半部をB区とした。検出遺構は掘立柱建物、竪穴住居、溝、土坑等である。掘立柱建物SB1は4×3間以上、柱穴は一辺約50mの不整形形で深さは約0.3から0.6m、柱痕は直径0.2m。竪穴住居SH14は一辺約4m、深さ0.28m。両遺構ともに時期を明確にする遺物は出土しなかったが、6～7世紀の遺構と思われる。溝は黒褐色埋土のSD3とSD15を除き他は全て灰色砂質土系埋土で中世の黒色土器や土師皿の碎片を包含する。SK20は一辺0.8m、深さ0.96mの土坑で下層から須恵器、土師器が出土した(1～4)。土師器甕2・4は口縁部肩部は完形であるが、胴部下半を故意に欠損させ埋納したと考えられる。SK45は一辺0.6m、深さ1mの土坑で下層から須恵器杯身、杯蓋が出土した。この6世紀代の両土坑



B区完掘状況



A区 SB-1

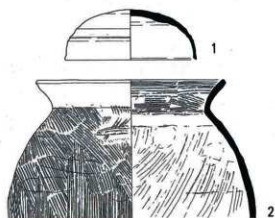


SK20 遺物出土状況

は性格は不明であるが、方形の掘り方で約1mの深さ、土器を埋納する等の類似点がある。

P46は直径0.27m、深さ0.37m、掘立柱建物の柱穴と思われる。柱穴内に13世紀代の黒色土器碗が3点重ねて埋納されていた。その他近世以降の遺構に一辺3m、深さ0.8mの土坑SK21がある。土取り坑と思われる。

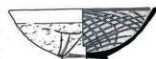
(佐伯)



SK20出土 須恵器・土師器



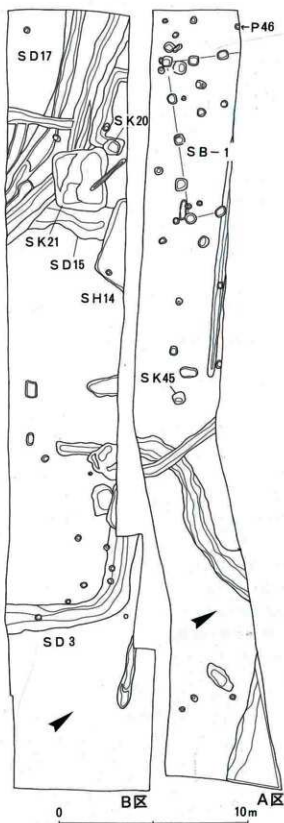
SK45出土 須恵器



P46出土 黒色土器



SD17 石鍬
S = 1/2



出土遺物実測図 S = 1/4

遺構図

⑬ 辻 遺 跡

調 査 地：栗東町大字辻字小坂西411-1、412-4

調査期間：1996年10月17日～11月27日

調査面積：390㎡

当調査地は、辻遺跡内でも南東端にあたる。

過去の調査では、調査地の北西と西側で旧河道が検出されており、調査地は、旧河道に挟まれた微高地であったと思われる。

基本層序

現地表面から遺構面までは約40cmの堆積土があり、上層から順に、灰褐色系粘質土（耕土）→明黄色系粘質土→青灰色系粘質土（近代遺構面）→明黄色系粘質土を経て、黄褐色系粘質土の地山（遺構面）が存在する。

主要遺構の概要

近代遺構はSK-1・SD-2が該当する。SK-1は埋土中に、陶磁器・鉄滓・棧瓦が含まれており、「辻鋳物師」による、原料（粘土）取得用の採掘土杭と思われる。

古代から近世の遺構は、同一面で検出した。柱穴（ピット）は、建物規模などを明確にし難いが、出土遺物により、7世紀後半代と12世紀代に大別できる。中世の遺構は柱穴の他に、井戸が該当する。7世紀後半代の柱穴は、堅穴住居に後出する。SH-1の埋土には、一部7世紀後半の遺物が混入しており、堅穴住居廃絶直後に柱穴が造られたと思われる。

堅穴住居の概要



調査地位置図

SH-1：掘削を受け、遺存状況は悪い。規模は5×4.5m以上で、東側にカマドを持つ。重複関係により、SH-2に後出している。

SH-2：SH-1に切り込まれ、遺存状況は悪い。規模は4×4.5m、検出深は20cmを測る。内側に壁溝が巡る。壁溝は北東隅で途切れており、出入口が存在したと思われる。

中央には、70×70cmの範囲で炉跡と思われる焼土面を確認した。

SH-3：規模は4.7×4.7m、検出深15cmを測る。内側に壁溝があり、壁溝の途切れる西南部は出入口と思われる。住居中央西寄りには、40×40cm範囲の焼土面があり、炉跡と思われる。

堅穴住居の遺物について（図1・2・4）

SH-1は、7世紀前半から後半の須恵器・土師器が出土した。辻遺跡周辺でカマドが一般化するの、5世紀中頃から6世紀代。堅穴住居が見られるのは、7世紀までであり、当住居跡は、遺跡内の堅穴住居でも、最終段階に築造された可能性がある（図3）。

SH-2は、SH-1に切り込まれており、遺物は確認できなかった。

SH-3は、庄内併行期後半から布留併行期初め（布留0式）、3世紀後半から4世紀初めの土器が出土した（図5）。口縁が肉厚で、庄内併行期後半に位置づけられる遺物は数点しかなく、布留併行初めの要素が強い遺物内容である。遺物未確認のSH-2は、炉を持つ住居形態がSH-3と類似するため、同時期に存在した可能性がある。

鉄製品は、SH-1から鉄斧・鉄鉋具が、SH-3から土した（図2）。

まとめ

堅穴住居についてまとめる。住居数はSK-1による地山の攪乱を考慮しても、散在的で少数である。

調査地から旧河道を挟み、北250m、西450mの地点では、玉造り工場や堅穴住居群が検出されており、中心（拠点）的な性格を帯びる。

これに対し、当調査区は遺構が希薄であることから、同じ辻遺跡内であっても、外縁的（周縁的）な性格を持つと思われる。

しかし、町内の竪穴住居で鉄製品が豊富に出土する、辻・岩畑遺跡にあって、当調査区も鉄製品を確認しており、その影響を受けていたと思われる。

今後は、周辺の地形復元を深化させつつ、遺跡内での様々な性格の差異を追求していく必要がある。（藤岡）

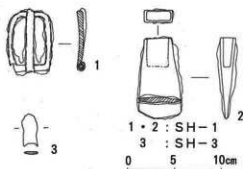


図1 竪穴住居出土鉄製品実測図 (S=1/4)

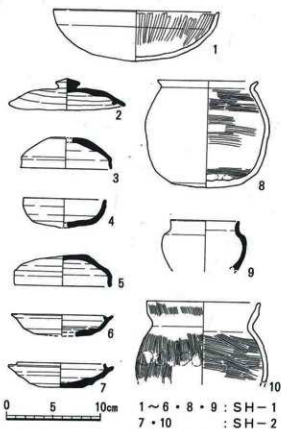
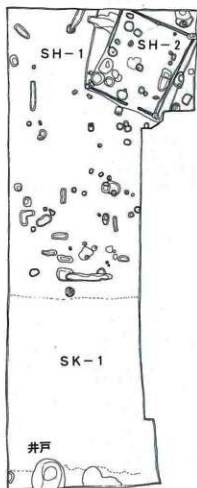


図2 トレンチ1 竪穴住居出土遺物 (S=1/4)

トレンチ1



トレンチ2

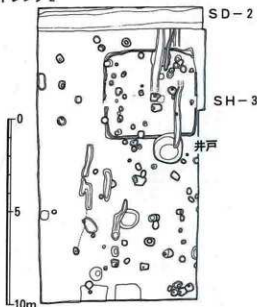


図3 調査地遺構図

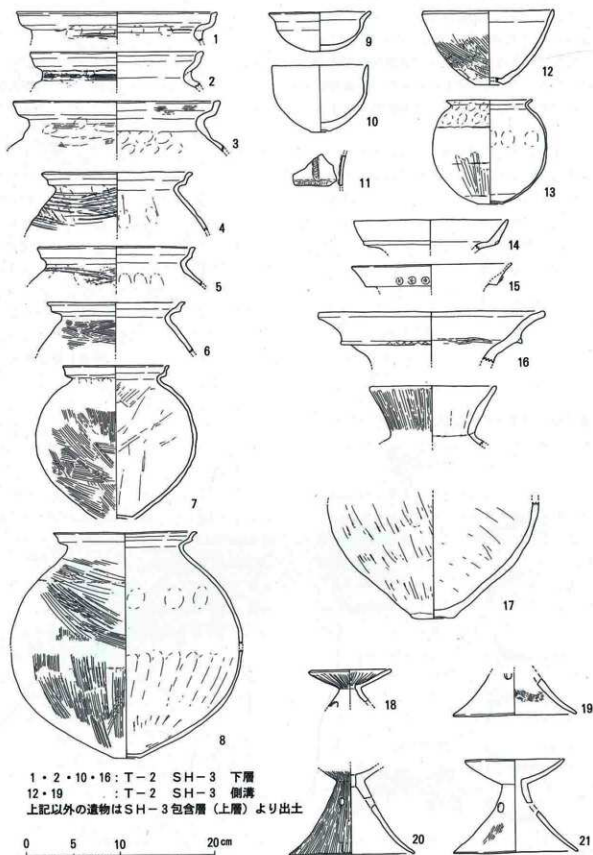


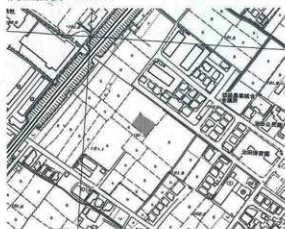
図4 トレンチ2 竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/4)

⑬ 坊袋遺跡

調査地点 目川868-1 ほか

調査期間 1996年1月20日～3月6日

調査面積 360㎡



調査区位置図

坊袋遺跡は、安養寺山から北西にのびる舌状丘陵先端の微高地に位置し、周辺には金勝川の後背湿地が広がる環境にある。

これまでに弥生時代中期および後期の遺構の存在が知られており、今回の調査地点の北西隣地では中期後半の方形周溝墓3基や旧河道が確認されている。

調査では耕土直下、標高100.50mで中期後半の土坑や、中世以降の小溝群や流路が検出された。

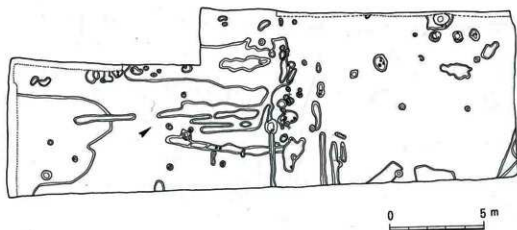
土坑は、規模・形状等、多様である。調査区北端の数基は、いずれも円形状を呈し、径0.8m、深さ0.6mを測る。中央部に見られる土坑は不整形形状を呈し、規模1.5m×1.2m、深さ0.1mを測る。(大崎)



調査区南西部(北方向)



調査区北西部(北西方向)



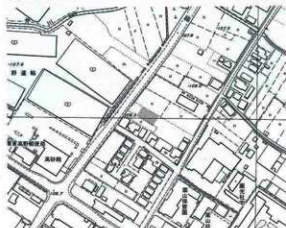
調査区平面図

⑪ 高野遺跡

調査地点 高野字下戸別当577-1

調査期間 1997年1月20日～3月6日

調査面積 360㎡



調査区位置図

高野遺跡は、隣接する辻、岩畑遺跡とともに栗東を代表する古墳時代集落遺跡として周知されており、北と南に二つの集落群が知られるほか、前方後方形周溝墓も確認されている。今回の調査区はその北集落群の一端にあたる。

調査では耕土直下に拡がる黄灰色層上、標高106.90mで溝、ピットを検出した。

溝は、東西方向に延び、幅0.4m、深さ0.2mを測る。古式土師器片（甕）が出土し、4

世紀の遺構である。

ピットはいずれも径0.2～0.4mのものである。遺物の出土はないが、遺構の重複関係や埋土から前者に後出するものと推察される。

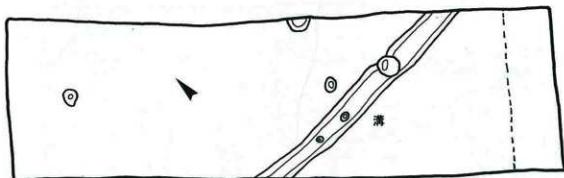
(大崎)



調査区全景（北西方向）



溝近景（西方向）



調査区平面図

⑮ 高野遺跡

調査地点 大橋7丁目388-1 ほか
 調査期間 1996年12月10日～12月16日
 調査面積 200㎡



調査区位置図

高野遺跡は古墳時代以降、中世に至る様々な遺構遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも古墳時代集落群と平安中期以降の中世集落はその主要なものである。

今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代の屋敷跡の一部が確認されている。

調査では耕土直下、標高106.40mで主軸を現状地割り方向（栗太主条里）にあわせた掘立柱建物2棟や付設する雨落ち溝が検出された。建物の全容は明瞭でないが、4柱間以上

の総柱の建物と推定される。雨落ち溝は幅0.8m深さ0.2～0.3mを測る。

出土遺物には、黒色土器や土師器のほか、白磁やスラッグなども含まれている。

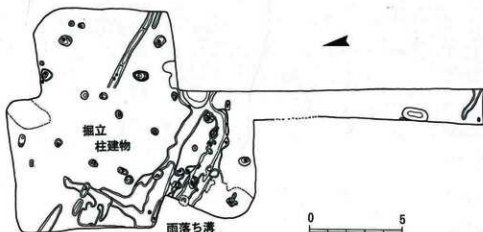
(大崎)



雨落ち溝（南東方向）



掘立柱建物（東方向）



調査区平面図

⑬ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字屋どや520-2
 調査期間 1997年2月3日～1997年3月31日
 調査面積 598㎡



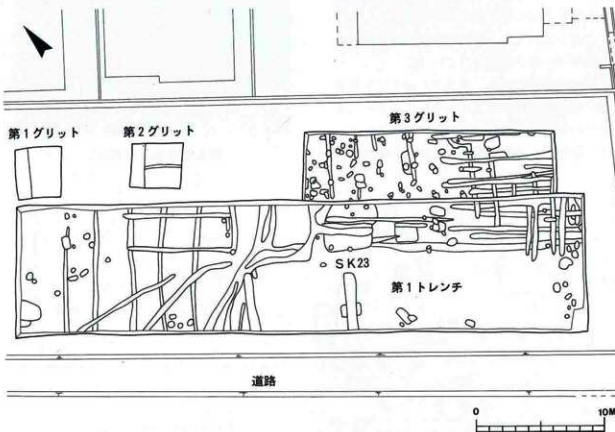
調査地位置図

はじめに 今回の調査は、土地区画整理事業に伴う発掘調査である。調査にあたっては、調査対象地の南側に第1トレンチを、北側に4×3.5m程の第1～第3のグリットを設定して調査を行った。また、第3グリットは、第1トレンチの遺構の拡がりを確認する必要から、さらに東側へ拡張し調査を行なった。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の3層である。上層から層厚10～20cm程の現代耕作土、中世遺物包含層である層厚10cm程の灰茶褐色粘質土、中世遺構基盤層である層厚20cm程の灰褐色粘質シルト、そして、3～10cm程の礫を含む灰色粘性砂礫層の地山層である。

遺構の検出にあたっては、灰褐色粘質シルトで、また、下層遺構の有無の確認は、第1トレンチ南半部の地山層で行った。

以下、第1トレンチおよび、第1～第3のグリットの主要遺構について、その概要を報告することとした。



遺構平面図

遺構 検出した遺構には、平安時代の末から鎌倉時代初めの土坑・溝・柱穴・耕作痕、および鎌倉時代の土坑・溝・耕作痕等がある。

ここでは、第1トレンチおよび、第1～第3のグリットの主要遺構について、その概要を一括して述べることにする。

(平安時代の末から鎌倉時代初めの遺構)

中央部の方形土坑・柱穴群と第1トレンチ西半の耕作痕の一群である。

方形土坑は、南北2m・東西3.8m・深さ0.3～0.5m程を測る。包含層掘削時より確認できた不定形土坑と重複している。この不定形土坑は、後述する第3グリットの土器溜まりと同じ様相を示すものの、遺物的には、2次堆積による土器細片を包含するものである。

柱穴群は、形・規模とも多種多様であり、建物を想定するまでは至らなかった。しかし、いくつかの柱穴では、柱痕跡内に完形の黒色土器碗が出土しており、状況的に建物廃絶後の祭祀行為があったと想定してよいだろう。

また、その遺構群の中心は、調査対象地を越えさらに北側に拡がると考えられる。

第1トレンチ西半の耕作痕は、2.5m間隔程の格子状をなす耕作痕である。幅0.3～0.4m・深さ0.1m程を測る。

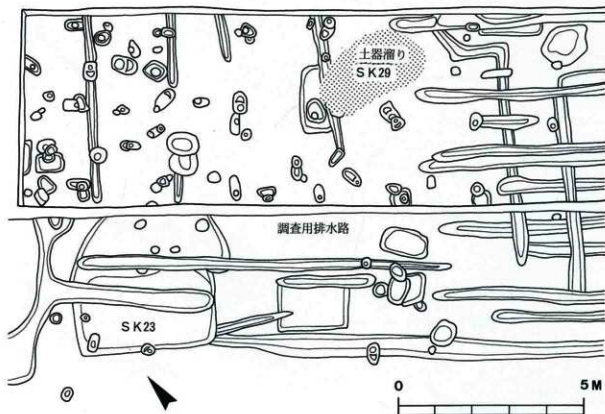
出土土器から、概ねこれらの遺構の時期は、12世紀末から13世紀初めの頃と想定される。

(鎌倉時代以降の遺構)

東半の耕作痕の一群は、前述のものより密な耕作痕である。耕作痕自体のその規模は、西半のものとはほぼ変わらない。また、西側から延びる正東西方向の溝群も、東半の耕作痕の一群と状況的に同時期のものと思われる。

また、第3グリットでは、前述のとおり包含層内で1×2m程の土器溜まりを、2ヶ所程検出した。土師器皿・黒色土器碗のほか須恵器甕片等が、完形のものが、比較的まとまった状況で出土している。

出土土器から、概ねこれらの遺構の時期は、13世紀中頃のものとして想定される。



第3グリット 遺構平面図

遺物 今回の調査で出土した遺物には、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器等の中世土器のほか、古伊万里等の近世陶磁器等コンテナー6箱程がある。しかし、量的にはそのほとんどが、中世遺物包含層・落ち込み状の不定形土坑等から出土したものであり、その遺存状態は概して悪く細片のことが多い。また遺構的には、前述の土器溜まりから出土した黒色土器碗・土師器皿であり、そのほかの遺構出土のものは少ない。

まとめ 以上、主要遺構について、その概要を述べた。ここでは、若干の整理を行いまとめとしたい。

(遺構の性格)

検出した遺構の様相は、平安時代の末から鎌倉時代初めの方形土坑・柱穴・耕作痕の一群と、鎌倉時代の土坑・耕作痕・土器溜まりとに分けることができる。これらの状況は、まさに旧土地区画利用の状況を示していると言ってよいだろう。

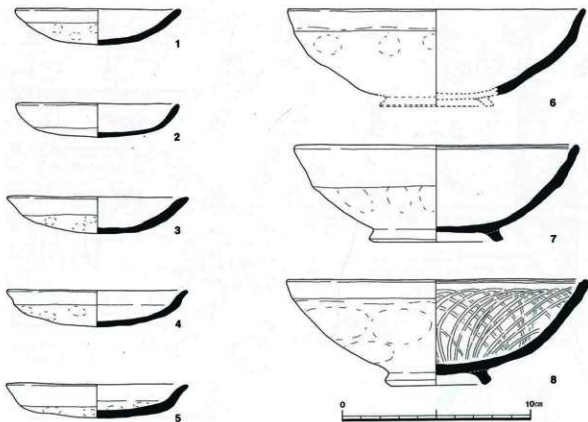
つまり、土坑・柱穴とから構成される建物とそれに付属する生産地区という利用状況から、その建物の廃絶後、この土地が広域的に生産地区として利用され、現在に至っている状況が窺うことができる。

また、積極的に理解すれば、居住区として選地されたことや暗渠排水施設等が検出されなかったことから、給排水の恵まれた生産地区として、当地域の需要に大きく貢献したであろうことも容易に推察される。

(遺跡の性格)

高野遺跡は、大規模な古墳時代の集落遺跡として周知されている。しかしながら、今回検出した遺構は、时期的には平安時代の末から鎌倉時代初めであり、その中心は、さらに北側に拡がると思われる。

この時期は、調査地は言うに及ばず全般的にも中世期の集落・生産地域が拡大する時期でもある。今後の調査に、中世集落の全体像が明瞭になることに期待したい。(狼向)



土器溜まり (SK29) 土器実測図



トレンチ検出状況（南東から）



3 グリットSK29土器出土状況（北西から）



トレンチ完掘状況（南東から）



作業風景（東から）



3 グリット完掘状況（北から）

② 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字北さるがう599・604

調査期間 1997年2月10日～3月31日

調査面積 411㎡



調査地位置図

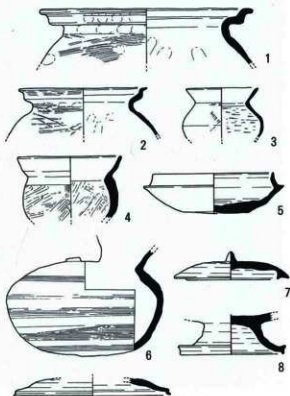
調査地は高野遺跡の北端に位置する。高野・辻遺跡では、1993年度から今年度にかけて区画整理事業に伴う発掘調査が行われている。本調査は区画整理事業地内の共同住宅建設に先立ち実施した。

遺構は、調査地を東西に流れる河川跡、溝などを検出した。河川跡の規模は深さ約1.5m、最大幅12m以上、遺物は縄文土器の他、主に古墳時代前期から平安時代の土器が出土した。6～7世紀の須恵器が下層から出土するなど、複雑な堆積状況であったが、最下層の砂礫層からは古墳時代前期の土器器が比較的まとまって出土した(10～17)。

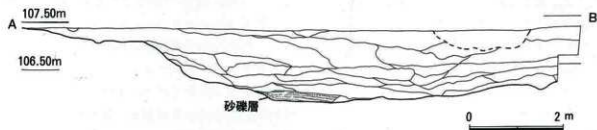
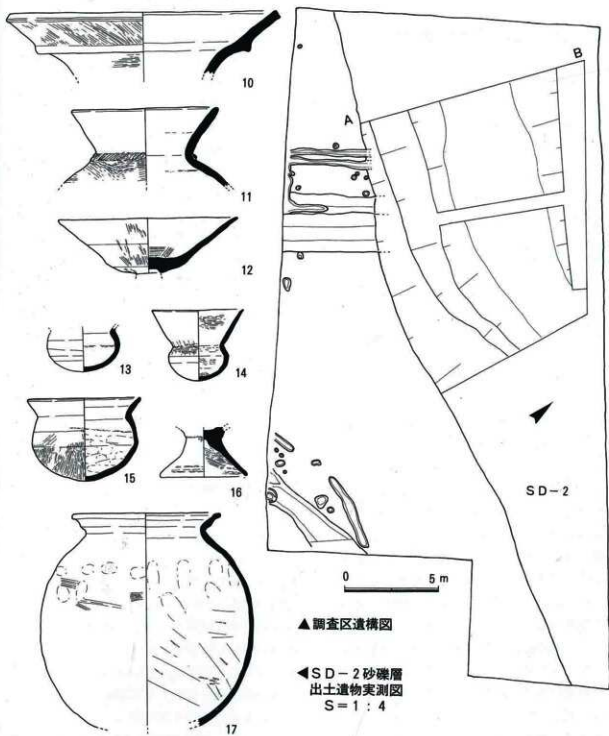
調査地南を西流する中ノ井川は小河川であるが当地域及び下流域の重要な農業用水であり、これまでの調査で中ノ井川周辺では古墳時代から江戸時代の河川が発見されるなど、流れの位置を大きく変えることなく存続してきたことが判明してきた。今回検出された河川跡も中ノ井川の前身となる河川の一つと考えられる。(佐伯)



S D - 2 下層遺物出土状況



出土遺物実測図 S = 1 : 4



SD-2 断面図

⑪・⑫ 岩畑遺跡

調査地 栗東町大字高野467-2他
調査期間 1997年10月1日～1997年2月～28日
調査面積 1205㎡



調査地位置図

岩畑遺跡は野洲川左岸の扇状地上部に分布する古墳時代の大規模集落である。野洲川下流域に広がる沖積地では最も標高の高い地域で、標高は109m前後である。弥生時代には未開発であった当地を新たに開発した集落で、遺跡は野洲川水系から引く灌漑用水の根元に位置し水利上重要な位置を占める。これまでの調査で式内社の高野神社付近を中心として4～6世紀の堅穴住居160棟以上の他、前方後方型周溝墓を含む墓域も確認されている。今年度の調査は、高野神社の南側で町道路拡幅に先立ち実施した。検出遺構は、6世紀から7世紀の堅穴住居・井戸・旧河道・溝、中世の土坑、中世から近世の溝等である。以下、時期ごとに概要を述べる。挿図は細長い調査区の南側をA区、北側をB区とした。

6世紀中葉から後葉 SH3、5×4m、深さ20cmの堅穴住居で主柱穴は径50cm、深さ23～74cm。SE68は3.8×4.8m、深さ3.8mの井戸で、中央南寄りには一辺0.9mの井戸枠痕跡が認められた。出土遺物から6世紀中頃に掘られ、6世紀末には埋められたことが判

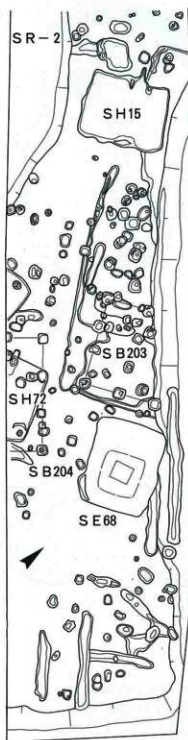
明した。なお古墳時代の井戸は当遺跡では初の確認である。

SD4・5は、幅2.5m、深さ80cmの溝で同時に掘られたものではないが前後関係は不明である。調査区の制限と河川SR2に切られるため全容は明らかではないが、SD4は南流から西流へと直角に屈曲する。遺物は多量の須恵器、土師器の他に、焼土や炭と伴に鉄滓とフィゴの羽口が出土した。SD6は、B区を南北に横切る溝で幅2～2.4m、深さ80cm、断面形態は逆台形である。下層の砂礫層から比較的まとまって遺物が出土した。

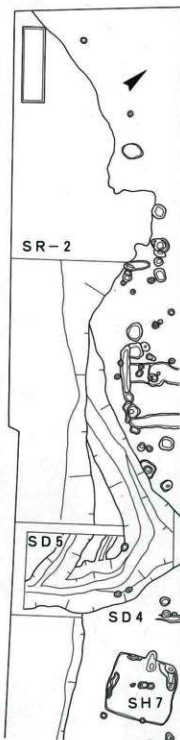
7世紀 堅穴住居が4棟が出土した。SH5・7・15・72である。一辺3～4mと小規模で、主柱穴を持たない構造である。いずれも南辺中央または中央東寄りにカマドがあり、SH5は北辺中央東寄りに屋内土坑（貯蔵穴）を持つ。

13世紀から14世紀 SK1は最大幅3m、長さ4m以上の長方形の土坑で、溝状の遺構になる可能性もある。深さは20cm。上層は20cm程度の礫で埋められており、それを取り除いた底面には土師皿、羽釜、黒色土器碗、常滑焼鉢などの多量の遺物が廃棄された状態で出土した。その他瓦が1点出土した。直径11.5cmの複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房に「社」の陽印がある。同様の瓦は京都市広隆寺及び三条西殿跡での出土の報告があり、時期は12世紀の後半とされている（平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣1977）。

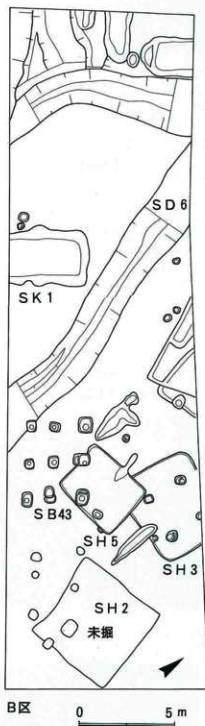
その他時期を特定する遺物は出土しなかったが、掘立柱建物を数棟検出した。SB203は3×2間、総柱の建物で規模は4.5m×4m。不正方形の柱穴は一辺約60cmで深さ36～54cm。建物の方位は6世紀の井戸や7世紀の堅穴住居と同一方向である。SB43は、2×2間で中央に東柱を持つ。規模は4m×3m。柱穴は一辺約80cmの方形で、深さ約30cm、柱痕は直径約25cmである。SB204は3×1間以上、柱穴は一辺50cmの方形で深さは50～60



A区南半

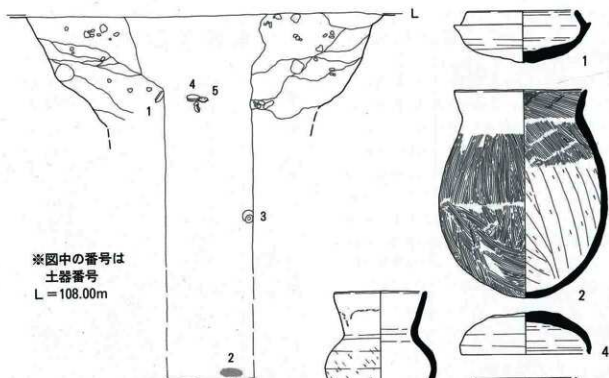


A区北半



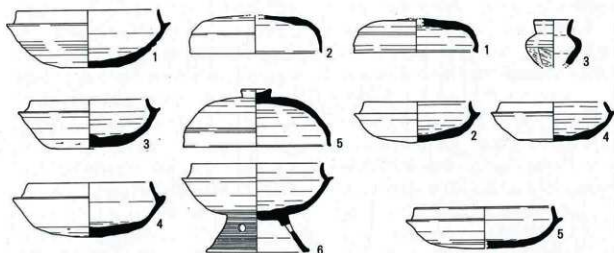
遺構図

cm。SB43・204の建物方位は正南北地割に
後出する栗太郡主条里と同一で、9世紀以降
のものと考えられる。(佐伯)

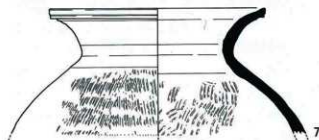


※図中の番号は
土器番号
L = 108.00m

▲井戸SE68断面図 S = 1 : 40
出土遺物実測図 S = 1 : 4▶



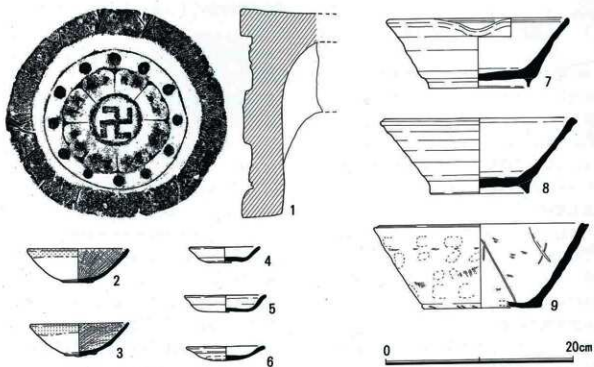
SD 5 出土遺物実測図 S = 1 : 4



SD 4 出土遺物実測図 S = 1 : 4



SD 4・5 合流地点出土ファイゴ羽口 S = 1 : 3



B区SK1出土遺物実測図

瓦 S=1:2 土器 S=1:4



A区全景 (南から撮影)



B区全景 (南から撮影)



A区 井戸SE68



B区 土坑SK1

㊸ 岩畑遺跡

調査地：栗東町大字高野字一橋494

調査期間：1996年12月9日～1997年2月8日

調査面積：1140㎡

本調査地は高野神社から西南80mの地点にあり、近隣の調査地(㊸・㊸岩畑遺跡)でも多数の竪穴住居が検出されている。

基本層序

上層から順に、層厚約50cm以内で暗灰色系粘質土(耕土)→茶褐色系粘質土→黄褐色系粘質土(包含層)を経て、黄褐色系粘質土(遺構面)にいたる。

主要遺構の概要

検出した遺構は、古墳時代のビット(柱穴)

・竪穴住居・旧河道である。

ビットは調査地内で3カ所に分散して存在するが、建物などを明確にできなかった。出土遺物は6世紀中頃から7世紀代に収まる。

竪穴住居は調査区南東隅に一棟あり、規模は5×4.5mで、主柱穴を持たない構造である。北西側に幅約50cm、深さ約20cmの壁溝が巡る。西辺中央北寄りには、カマドが存在する。住居内からは7世紀代の須恵器が出土した。上記のビット・竪穴住居は旧河道の堆積土(黄褐色系砂質土)上に築造されている。

旧河道は検出幅10～20m以上、検出深2.3mを測る。埋土は堆積土が複雑に混入するが大別すると①砂粒混入の黄褐色系粘質土②灰

褐色系細砂質土③灰褐色系砂礫層に分層できる。

出土遺物は受口状口縁甕・須恵器・土師器が見られ、4から8世紀代に収まる。

出土遺物の状況から、旧河道は7世紀代に竪穴住居周辺が埋没し、8世紀代に廃絶したと思われる。

まとめ

今回の調査地は、6～7世紀代の住居跡と4～8世紀代の旧河道を検出した。

調査地周辺の竪穴住居は7世紀を下限とし今回検出した竪穴住居も最終段階に該当する。

竪穴住居は旧河道の埋土上に築造されるが、ビットは散在的な上に、地盤はかなり不安定であった。旧河道は8世紀代も検出幅15m以上を測り、岩畑遺跡の居住域を長期間に渡って、大きく制約したと思われ、旧河道を以て、遺跡の西限りとした可能性がある。

今後は、自然地形の復元と共に、集落構成が明瞭になることを期待したい。(藤岡)



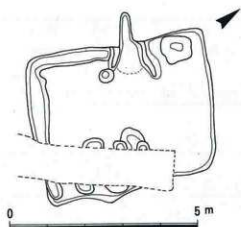
調査地北側全景



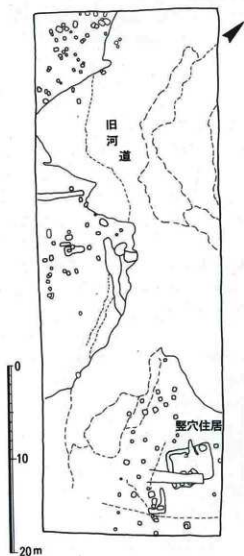
調査地位置図



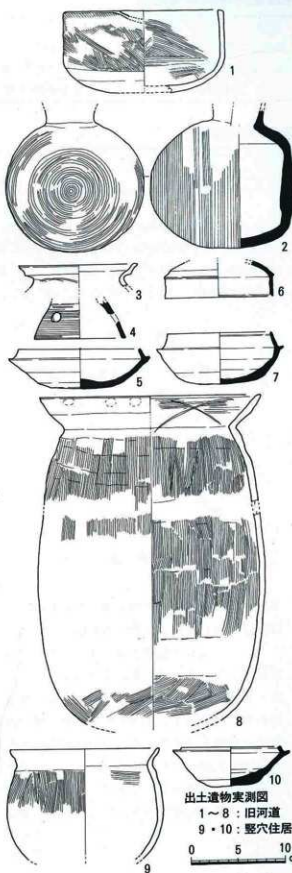
調査地南側全景



竪穴住居実測図



調査地遺構図



96年度国庫補助事業調査

	遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
24	雲仙寺	雲仙寺字南松馬鹿353-3・	個人住宅建設	土坑(縄)、旧河道(奈~平)	石鏃、須恵器・土師器	62	大崎
25	狐塚	安養寺7丁目615-1	個人住宅建設	溝、柱穴	須恵器(奈)	62	佐伯
26	辻	出庭1993	農業倉庫建設	竪穴住居・掘立柱建物・井戸(古)	土師器・須恵器	63	大崎

96年度町事業調査

	遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
27	下戸山	下戸山字野海道	範囲確認	古墳周溝・墳丘・葺石	埴輪・土師器	65	佐伯

遺構覧では、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代

(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代

また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

②④ 霊仙寺遺跡

調査地点 霊仙寺字南松馬鹿353-3・6
 調査期間 1996年8月22日～6月5日
 調査面積 60㎡



調査地位置図

霊仙寺遺跡は縄文時代中期以降、多様な時代の遺構遺物を残す複合遺跡として知られている。中でも弥生時代のそれは中ノ井川中流域最古の弥生時代遺跡として、興味深い貴重な資料を提供している。

特に本調査区に隣接する北西区域では集落北西端を画する環濠となる可能性の高い幅3mを測る3条の溝が確認されている。

今回の調査では、それに直接関係する遺構は認められなかったが、耕土直下（標高91.00m）で、中ノ井川の旧河道やいくつかの不整形の土坑が確認された。

出土遺物には弥生土器や小片や石鏃が見られる。（大崎）



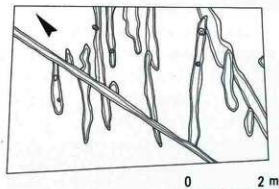
調査平面図

②⑤ 狐塚遺跡

調査地 栗東町安養寺7丁目615-1
 調査期間 1996年6月20日～6月27日
 調査面積 37㎡



調査地位置図



遺構図

狐塚遺跡は、縄文時代から近世に至る集落遺跡と、古墳時代中期から後期の狐塚古墳群により構成される複合遺跡である。

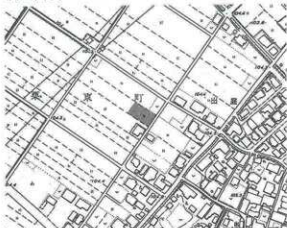
今回の調査地の南隣では1990年に奈良時代前半の井戸が検出され、「大殿」の墨書がある土師器杯身などが出土した。また、その周辺では「水室」の墨書土器や無文銀銭も出土している。しかしながら今回の調査では、奈良時代の遺物包含層、中世の柱穴、溝、近世の耕作痕及び近世以降の暗渠排水路の確認にとどまった。（佐伯）

② 辻 遺 跡

調査地点 出庭1993

調査期間 1996年11月26日～12月11日

調査面積 225㎡



調査区位置図

辻遺跡は縄文時代前期以降、様々な時代の遺構遺物を残す複合遺跡として知られている。とりわけ古墳時代のそれは、竪穴住居から成る複数の集落が高密度に分布し、隣接する高野・岩畑遺跡を含めて野洲川流域における代表的な集落群を形成している。

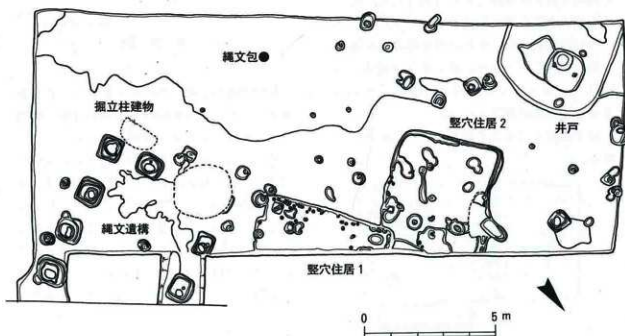
今回の調査は従来知られている集落域から北西に約300mほど外れた地点にあたるが、下記のように極めて興味深い知見が得られた。以下にその概略を記述する。

調査では耕土直下、標高103.90mの黄灰色層上で古墳時代の大型の掘立柱建物1棟、竪穴住居2棟、井戸1基などが確認されたほか、縄文時代中期の遺構や遺物層の拡がりをもその下層で検出している。

掘立柱建物は梁間3柱間×桁行4柱間以上の略東西棟の建物である。柱間寸法は、1.7～1.8mを測る。柱穴掘りかたは一辺0.8～1.0



調査区全景（北西方向）



調査区平面図

■の方形を呈し、径0.3m程度の柱痕を残す。

竪穴住居は一辺4.0～5.0mの方形を呈し、4支柱構造の住居である。

井戸は一辺4.0mの不整形の掘りかたほぼ中央に円形の井戸本体を構築するものである。

縄文の遺構は一部の調査を実施したにとど

まるが、中に楕円形状の焼土の拡がりとして確認できたものがある。

古墳時代遺構はいずれも5世紀前半～6世紀後半に位置づけられ、竪穴住居 → 掘立柱建物 → 井戸という先後関係で把握されるが、建物と井戸は時期的に一部重複した可能性を否定するものではない。(大崎)



掘立柱建物（南西方向）



掘立柱建物（南東方向）



井戸（北東方向）



井戸全景



竪穴住居 1（南西方向）



竪穴住居 1 遺物出状況

⑦ 下戸山古墳

調査地 栗東町下戸山字野海道

調査期間 1997年2月6日～3月31日

調査面積 30㎡

下戸山古墳は琵琶湖南部の平野部を望む低丘陵上に築かれた古墳で、現在は直径30m程の円丘部分を除き墓地として利用されている。

同一丘陵には南約200mに前期古墳の北谷11号墳を含む北谷古墳群（消滅・4～6世紀）、南東300mには式内社の小槻大社境内を中心に分布する小槻大社古墳群（未調査）、さらに北西600mには岡遺跡の栗太郎衛を挟み、地山古墳（墳長90m・帆立貝形・5世紀）が存在する。ここにみるようにこの丘陵地は、古墳時代前期から後期まで連続と古墳が築かれていて、律令期にはいと郡衙がおかれるなど古代の周辺地域において重要な位置を占めたことが窺えるのである。

下戸山古墳は1993年度に地形測量調査を実施し、円丘部の直径が約50m、高さは7.5mで、地形から見て丘陵尾根の延びる西側に前方部がつく可能性が強まった。

今年度は地形測量の成果を踏まえて、正確な墳丘規模を確認するため、周溝推定部分の3ヶ所にトレンチを設け発掘調査を行った。

その結果、2ヶ所から墳丘基底部に残る葺石

を確認した。第1トレンチでは幅約4m、深さ約2mの周溝と葺石を確認した。第2トレンチでも墳丘基底部と葺石を確認したが、第3トレンチではバラスによる盛り土層が厚く30cm掘り下げた時点で掘り込みを断念した。葺石は根石列の石材は比較的大きく約40cm程で、他は大小様々なものが使われている。石材は金勝川を挟んだ北側にある金勝山に産する角礫状の石材が使われている。この石材は地山古墳や狐塚3号墳の葺石も用いられている。

古墳時代の出土遺物は埴輪と土器片がある。伴に周溝底や、転落した葺石に混在して検出された。埴輪は土師質の壺形埴輪もしくは円筒壺（朝顔）形埴輪の口縁部から頸部である。土器は布置式併行期の受口状口縁臺の口縁部小破片である。

今年度の調査で下戸山古墳の墳丘は南側から延びる丘陵尾根を周溝によりカットして、直径約50mの墳丘を築いていることが判明した。また墳丘基底部には良好な状態で葺石が遺存する事が明らかとなった。古墳の築造年代は、資料は少ないものの土器と埴輪から4世紀代と確認された。下戸山古墳は、4世紀後半築造の北谷11号墳、5世紀前半築造の地山古墳の間に築造された首長墓であろう。

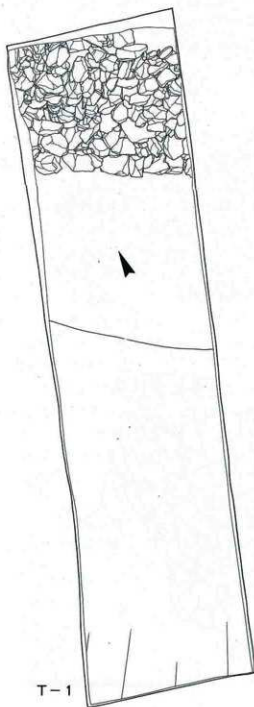
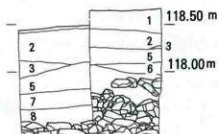
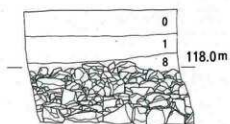
（佐伯）



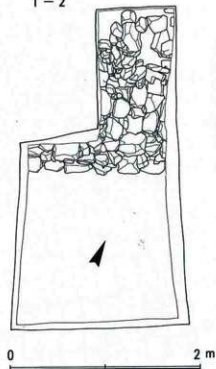
調査地位置図



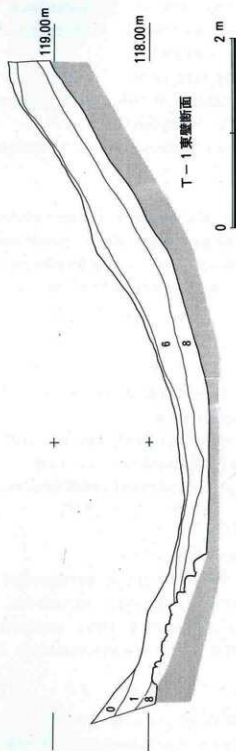
下戸山古墳墳丘測量図・トレンチ配置



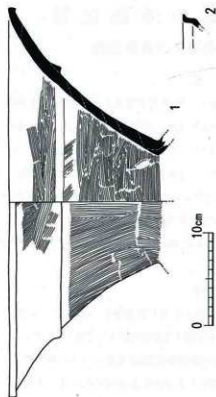
T-2



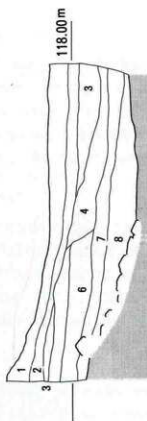
T-1 墓石検出状況



T-1、T-2 断面図



T-1 出土遺物実測図 S=1:4



T-2 東壁断面

- | | | | |
|---|-------------------|-----|------|
| 0 | 客土 (腐植土) | 4・5 | 濃黄色土 |
| 1 | 表土 (腐植土と黄色土のブロック) | 6 | 黄褐色土 |
| 2 | 客土 (腐植土と黄色土のブロック) | 7 | 暗灰色土 |
| 3 | 客土 (濃黄色土と地山のブロック) | 8 | 黒灰色土 |

職員 の 活 動 記 録

研究会等での発表活動

近藤 広

- ・「栗東町・新考古学事情」講演会「遺跡が語る栗東の歴史」古墳時代1996. 4. 27栗東歴史民俗博物館
- ・文化教養講座 滋賀をもっと知ろう第一回「辻遺跡と古墳時代の集落」1996. 6. 1 安曇川文化芸術会館
- ・第25回古墳時代研究会 「集落内祭祀と玉造工房」1996. 6. 8 立命館大学
- ・『近江の遺跡』『高野遺跡—古墳時代集落』1996. 7. 14 県立安土城考古博物館
- ・第41回埋蔵文化財研究会 「古墳時代から古代における地域社会」「岡遺跡成立前後の様相」1997. 3. 2 西南大学
- ・第70回滋賀県埋蔵文化財センター研究会 「辻遺跡」1997. 3. 7 滋賀県埋蔵文化財センター
- ・社団法人栗東青年会議所1997年度3月例会 「古代のロマン“はっくつ”」古墳時代のようす」1997. 3. 13 栗東町商工会館

佐伯 英樹

- ・「栗東町・新考古学事情」—講演会 「遺跡が語る栗東の歴史」弥生時代1996. 4. 27栗東歴史民俗博物館
- ・第40回埋蔵文化財研究会集 「考古学と実年代」「滋賀県二ノ畦・横枕遺跡、下鉤遺跡」1996. 8. 17 高槻現代劇場
- ・第70回滋賀県埋蔵文化財センター研究会 「伊勢遺跡」「安養寺遺跡」1997. 3. 7 滋賀県埋蔵文化財センター
- ・社団法人栗東青年会議所1997年度3月例会 「古代のロマン“発掘”」「弥生時代のようす」1997. 3. 13

論文・研究報告他

近藤 広

- ・「碧玉製石剣出土の玉造り関連工房 栗東町辻遺跡」「滋賀文化財だより」№218 1996. 5. 1
- ・「石剣出土の玉造り工房」「滋賀考古」第16号 滋賀考古学研究会1996. 8. 17
- ・「滋賀県」第40回埋蔵文化財研究会集 「考古学と実年代」第二分冊資料集 埋蔵文化財研究会1996. 8. 17 (共著)
- ・「滋賀県」「発掘された地震痕跡」埋蔵文化財研究会・埋文関係救援連絡会議1996. 8. 17 (共著)
- ・「岡遺跡成立前後の様相」「古墳時代から古代における地域社会」第41回埋蔵文化財研究会発表要旨資料 埋蔵文化財研究会1997. 3. 1

佐伯 英樹

- ・「野洲川流域の渡来文化」『湖国と文化』77号 滋賀県文化振興事業団1996. 8
- ・「滋賀県二ノ畦・横枕遺跡、下鉤遺跡」第40回埋蔵文化財研究会集 「考古学と実年代」第一分冊発表要旨集 埋蔵文化財研究会1996. 8. 17
- ・「弥生時代後期居住域の南東側で河川調査 栗東町野尻 伊勢遺跡」『滋賀文化財だより』№218 1996. 5. 1
- ・「安養寺山麓で布留式併行期の堅穴住居と土坑を検出 栗東町安養寺 安養寺遺跡」『滋賀文化財だより』№218 1996. 5. 1
- ・「古墳時代から古代における地域社会」第41回埋蔵文化財研究会資料集「中村遺跡」ほか埋蔵文化財研究会1997. 3. 1

雨森 智美

- ・「郡衙級の官衙遺跡の一部か 栗東町手原 手原遺跡」『滋賀文化財だより』№218 1996. 5. 1
- ・「滋賀県」第40回埋蔵文化財研究会集 「考古学と実年代」第二分冊資料集 埋蔵文化財研究会1996. 8. 17 (共著)
- ・「滋賀県」「発掘された地震痕跡」埋蔵文化財研究会 埋文関係救援連絡会議1996. 8. 17 (共著)
- ・「古墳時代から古代における地域社会」第41回埋蔵文化財研究会資料集「手原遺跡」ほか 埋蔵文化財研究会1997. 3. 1

発行日	1997年9月30日
編集・発行	勸業東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財調査課 〒520-3011 滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地 栗東町出土文化財センター内 TEL 077-553-3359 FAX 077-553-3514
印刷・製本	中村印刷所 滋賀県栗太郡栗東町下鉤681-5 TEL 077-552-2420(代) FAX 077-552-2370